

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第733集

令和2年度発掘調査報告書

木戸場遺跡 中平遺跡 境・山下遺跡

ほか調査概報（6遺跡）

2021

（公財）岩手県文化振興事業団

令和2年度発掘調査報告書

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、令和2年度に当センターが発掘調査を実施した全遺跡の調査成果をまとめ、調査報告書及び調査概報として発刊するものです。令和2年度は、全県下で9遺跡、50,174㎡が調査され、縄文時代から近世までの遺構、遺物が検出されております。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました各事業者、地元教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和3年3月

公益財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 高橋 嘉行

目 次

令和2年度発掘調査の概要	1
--------------------	---

I 発掘調査報告

(1) 木戸場遺跡 (久慈市)	5	(3) 境・山下遺跡 (奥州市)	29
(2) 中平遺跡 (野田村)	19		

II 発掘調査概報

(4) 北条館跡 (紫波町)	49	(7) 明神下遺跡 (奥州市)	52
(5) 間野村遺跡 (紫波町)	50	(8) 平清水 I・II 遺跡 (野田村)	53
(6) 中林下遺跡 (奥州市)	51	(9) 二子城跡 (北上市)	54

報告書抄録

木戸場遺跡 (久慈市)	55	境・山下遺跡 (奥州市)	57
中平遺跡 (野田村)	56		

令和2年度発掘調査の概要

令和2年度の発掘調査は、当初計画で8遺跡・面積58,075㎡で開始した。調査中止1遺跡（梶沢Ⅱ遺跡）、新規追加2遺跡（間野村遺跡・中平遺跡）があり、最終的には9遺跡・面積50,174㎡の調査を行った。前年度実績6遺跡・面積103,066㎡と比較し、遺跡数では3遺跡増、調査面積では半減している。本年度の発掘調査は、県内の3市、1町、1村で実施した。復興関連調査は三陸道路建設事業に関連する2遺跡の調査である。三陸道路建設事業に代表される復興関連の発掘調査は今年度ですべて完了した。通常調査は7遺跡で、内訳は治水対策事業関連1遺跡、農地整備事業3遺跡、道路改良事業2遺跡、市町村からの委託事業1遺跡となっている。

縄文時代では、木戸場遺跡・中平遺跡・二子城跡・間野村遺跡・平清水Ⅰ・Ⅱ遺跡で溝状の陥し穴状遺構が見つかった。二子城跡で中期前葉頃の住居が1棟見つかった。

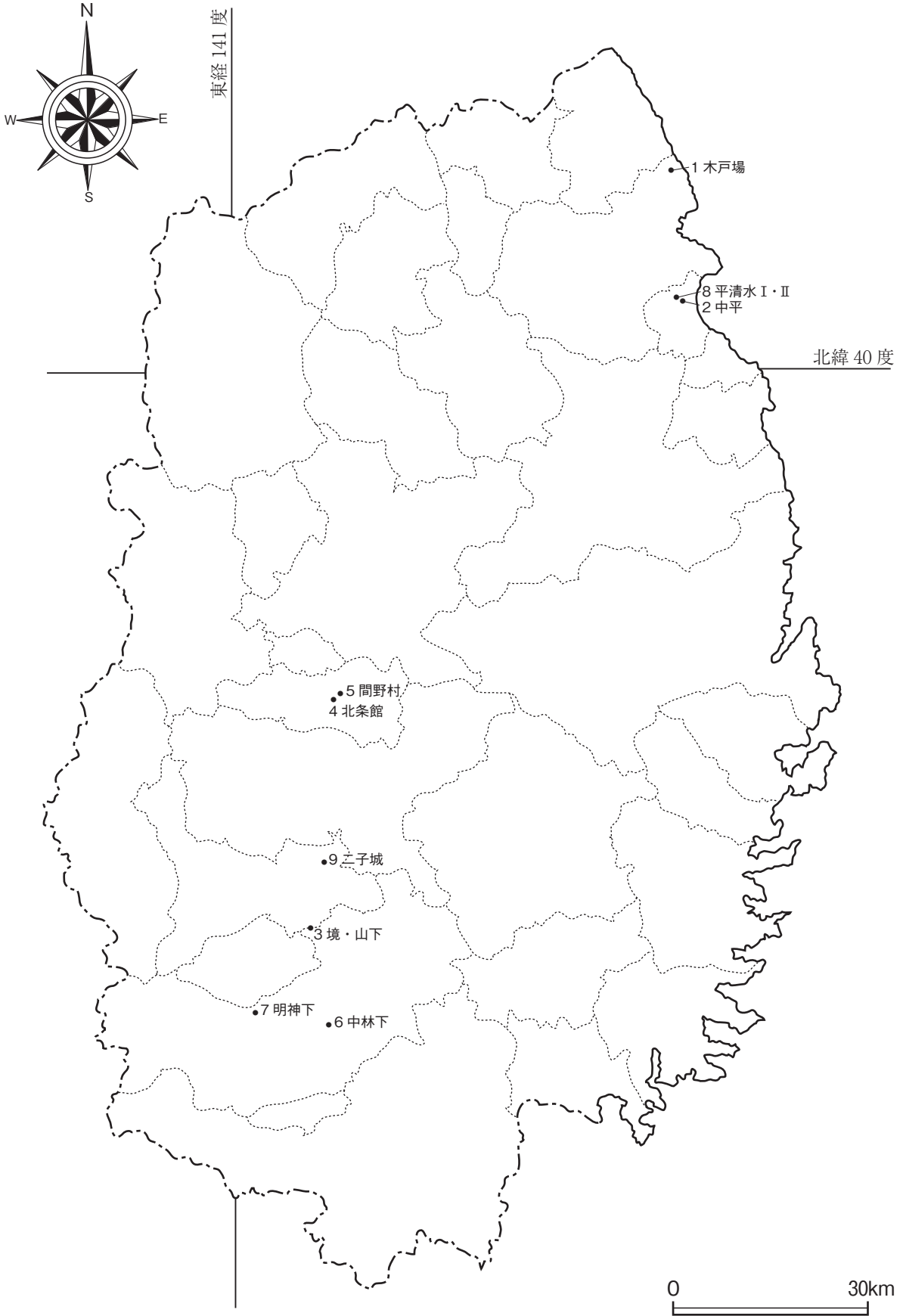
弥生時代では、木戸場遺跡で中期前半期の土器が少量出土した。二子城跡では、北上市内では初見と思われる後期の地床炉を持つ住居2棟と墓と思われる土坑1基が見つかった。

紫波町の間野村遺跡は平安時代9世紀前半期の集落跡である。人頭大の円礫で丁寧に構築された煙出と煙道の壁を支えるように礫を丁寧に積み重ねた煙道を持つ住居が見つかった。遺物の出土量は少ないが、「中」あるいは「巾」と読み取れる文字が墨書された須恵器坏1点が出土している。全体の状況は不明であるが、同様の地形面が周辺に広がることから、関連する竪穴住居等が分布すると思われる。奥州市水沢真城にある中林下遺跡は、平安時代9世紀を中心とした遺跡である。広範囲の調査にも関わらず、通常の集落に一般的に見られる竪穴住居が極端に少なく、掘立柱建物が卓越する構成である。調査対象地の約3分の2（約10,000㎡）が終了し、竪穴住居2棟・掘立柱建物12棟が見つかった。掘立柱建物の柱穴底面に柱材や礎板に使用した板材が残る事例が複数あった。奥州市胆沢若柳地内にある明神下遺跡は、今年度約12,000㎡（全体の60%）について調査を行い、9世紀後半から10世紀前半の大規模な集落の様子が明らかになった。竪穴住居・工房が84棟みつき、69棟については調査を終了している。竪穴住居は平面形や規模が様々で、カマドのほかに住居内に炉を持つ事例が多く、鍛冶などを行う特別な集落であったと想定されている。緑釉陶器や灰釉陶器、石帯など一般の集落からはあまり出土しない特殊な遺物が出土している。このような遺物を所有することのできる人が関わる重要な集落であったと考えられる。調査は翌年度も予定されており、竪穴住居は今年度分も含め総計で100棟以上に及ぶと思われる。

中世では紫波町の北条館跡調査が今年度で3年目となり最終年に該当する。16世紀後半代を中心とした城館跡と考えられていたが、今年度の調査で、より時代の古い15世紀の青磁碗などが堀から出土したことにより、築城年代が15世紀まで遡る可能性が考えられるようになった。奥州市の中林下遺跡では、古代の掘立柱建物のほかに16世紀の陶器片を伴う堀（上端幅約2m前後）が見つかった。堀で区画された内部には、掘立柱建物を構成する小規模な柱穴が密に分布しており、当該期の居館跡と推定されている。北上市の二子城跡では、二子城の城域西側を画する南北に連なる堀を約120mにわたって調査した。

平成24年の後半期から始まり、足掛け9年に及んだ復興関連の発掘調査は、今年度の三陸道路建設事業関連の調査をもって終了した。この間、沿岸南部の陸前高田市から北部の洋野町まで、延べ170遺跡・面積約750,000㎡に及ぶ遺跡の調査を行ったことになる。

（調査課長 斎藤邦雄）



報告遺跡位置図

数字は発掘調査報告・概報番号と共通

I 発掘調査報告

凡 例

- ・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。
 - 大コンテナ：42×32×30cm
 - 中コンテナ：42×32×20cm
 - 小コンテナ：42×32×10cm
- ・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。
(例) 竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

(1) 木戸場^{きどば}遺跡

所在地	久慈市侍浜町本町地内	遺跡コード・略号	JG00-0135・KB-20
委託者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	2,900㎡
事業名	三陸沿岸道路	調査終了面積	2,900㎡
発掘調査期間	令和2年5月7日～6月25日	調査担当者	溜 浩二郎・野中裕貴

1 調査に至る経過

木戸場遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（久慈北～侍浜）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、令和元年10月11日付け国東整陸一調第41号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課総括課長あてに試掘調査を依頼し、令和元年10月31日～11月1日にわたり試掘調査を行い、令和元年11月26日付け教生第1070号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図

(1) 木戸場遺跡

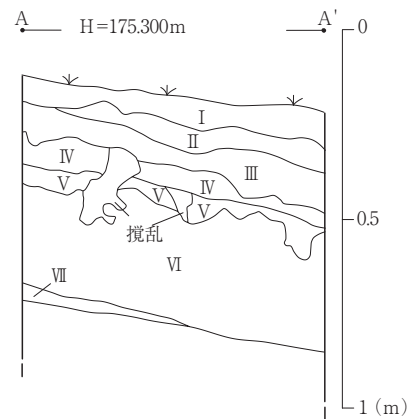
2 遺跡の位置と立地 (第3図)

木戸場遺跡は、久慈市侍浜町本町地内に所在し、JR 東日本八戸線侍浜駅から東に約2.5kmの位置にある。侍浜以北に発達する上位段丘群のひとつ、三崎面と呼ばれる海拔200～160mの丘陵面に位置する。調査地は陸中中野駅の南で太平洋に注ぎ入る高家川の支流に沿う東西尾根の北縁斜面部で、標高は170～175mを測る。本調査区西側は平成29年に当センターで調査が行われ、縄文時代の陥し穴状遺構・土坑・焼土遺構などの遺構や石鏃・寛永通宝などの遺物が見つかった。調査前の現況は雑木林である。

3 基本層序 (第2図)

基本土層は調査区内で土層が良好に残存する調査区西側斜面部で観察を行い、I～VII層に分層されることを確認した。斜面高位面は、造成による地形改変のため、遺構検出面のⅢ層まで掘削を受けて消失しているが、それ以外は概ね以下の堆積を基準とする。

- I層：10YR3/2 黒褐色シルト 現表土 層厚約20～30cm
- II層：10YR2/3 黒褐色砂質シルト
- III層：10YR2/1 黒褐色シルト 遺構検出面
- IV層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト
- V層：10YR3/4 暗褐色シルト 褐色シルト (10YR4/4)
混じる
- VI層：10YR5/6 黄褐色粘土質シルト 暗褐色シルト
(10YR3/4) 30%含む
- VII層：10YR4/6 褐色砂質シルト 粘性強 しまり中



第2図 基本土層



第3図 調査区と周辺地形

4 調査の概要

調査に先立って行われた岩手県教育委員会の試掘トレンチ箇所を中心に人力によるトレンチを調査区全体に17箇所設置し、遺構検出面までの深さと土層の堆積状況を確認した。その後、遺構検出面まで重機で掘削→人力による検出・精査・実測の順で作業を行った。

(1) 遺構

今回の調査で陥し穴状遺構10基、土坑1基、集石遺構2基を検出した。いずれの遺構内からも遺物は出土していない。

1号陥し穴状遺構（第5図、写真図版2）

調査区北東側に位置し、V層で検出した。遺構の西側が調査区外へと延びる。平面形状は溝状を呈し、長軸が北西－南東方向を向く。規模は開口部径355×38cm、底部径361×14cm、検出面から底面までの深さは93cmを測る。埋土は自然堆積で3層に分かれ、上位に暗褐色シルト、中位に黄褐色シルトと暗褐色シルトの混合土、下位に黒褐色シルトをそれぞれ主体とする層が堆積している。底面両端はわずかにオーバーハングしている。また、底面には緩い凹凸があり、南東側がやや高い。時期は縄文時代と考えられる。

2号陥し穴状遺構（第5図、写真図版2）

調査区南西端に位置し、V層で検出した。平面形状は溝状を呈し、長軸が東西方向を向く。規模は検出した範囲で開口部径232×105cm、底部径257×7cm、検出面から底面までの深さは149cmを測る。埋土は自然堆積で6層に分かれ、全体に暗褐色シルトを主体とする。底面は概ね平坦で東側はオーバーハングしている。時期は検出状況や埋土から縄文時代と考えられる。

3号陥し穴状遺構（第5図、写真図版2）

調査区北東端に位置し、Ⅲ層で検出した。平面形状は溝状を呈し、長軸が北西－南東方向を向く。規模は開口部径394×63cm、底部径368×5cm、検出面から底面までの深さは105cmを測る。埋土は自然堆積で5層に分かれ、上・下位に黒色シルト、中位に褐色シルト混じりの暗褐色シルト層が堆積している。底面は緩い凹凸はあるが、概ね平坦である。時期は縄文時代と考えられる。

4号陥し穴状遺構（第5図、写真図版3）

調査区南端に位置し、V層で検出した。平面形状は溝状を呈し、長軸は南北方向を向く。規模は開口部径355×92cm、底部径318×31cm、検出面から底面までの深さは110cmを測る。埋土は自然堆積で6層に分かれ、上・下位に暗褐色シルト、中位に褐色シルトを主とする層が堆積している。底面は緩い凹凸があり、底面標高は南側がやや高い。時期は縄文時代と考えられる。

5号陥し穴状遺構（第6図、写真図版3）

調査区南側斜面部に位置し、V層で検出した。平面形状は溝状を呈し、長軸は北東－南西方向を向く。規模は開口部径343×68cm、底部径324×5cm、検出面から底面までの深さは104cmを測る。埋土は自然堆積で5層に分かれ、全体に暗褐色シルトを主体とし、下位～底面に黒褐色シルトによる層が堆積している。底面は大きく傾斜し、北東側の底面標高が低い。時期は縄文時代と考えられる。

6号陥し穴状遺構（第6図、写真図版3）

調査区西側に位置し、V層で検出した。平面形状は溝状を呈し、長軸は南北方向を向く。規模は開口部径281×23cm、底部径268×9cm、検出面から底面までの深さは63cmを測る。埋土は自然堆積で3層に分かれ、上～中位に黒色シルト、下位に黒褐色シルトを主とする層が堆積している。底面は大きく傾斜し、北側の底面標高が低い。時期は縄文時代と考えられる。

7号陥し穴状遺構（第6図、写真図版3）

調査区北側中央に位置し、V層で検出した。平面形状は楕円形を呈し、底面両端はわずかにオーバーハングしている。長軸は東西方向を向く。8号陥し穴状遺構と重複し、これを切る。規模は開口部径316×75cm、底部径288×7cm、検出面から底面までの深さは125cmを測る。埋土は自然堆積で6層に分かれ、上・下位に暗褐色シルト、中位に褐色シルトを主とする層が堆積している。底面は緩い凹凸があり、西側がやや低い。時期は縄文時代と考えられる。

8号陥し穴状遺構（第6図、写真図版4）

調査区北側中央に位置し、V層で検出した。7号陥し穴状遺構と重複し、これに切られる。開口部の平面形状は歪な楕円状を呈し、底面の形状は中央部が狭く、両端側が広がる形状である。底面両端はオーバーハングしている。長軸は北東-南西方向を向く。規模は開口部径335×120cm、底部径は長軸308cm、短軸26~58cmで検出面から底面までの深さは123cmを測る。埋土は自然堆積で6層に分かれ、上位は黒褐色シルト、中~下位は褐色・暗褐色シルトを主とする層の堆積である。底面は緩い凹凸があり、北側がやや低い。時期は縄文時代と考えられる。

9号陥し穴状遺構（第7図、写真図版4）

調査区南端の東側調査区境に位置し、V層で検出した。遺構の一部が調査区外へと延びている。2号集石と重複関係にあり、これよりも古い。平面形状は溝状を呈する。長軸は南北方向を向く。検出した規模は開口部径190×48cm、底部径は133×4cmで検出面から底面までの深さは93cmを測る。埋土は自然堆積で3層に分かれ、暗褐色・褐色シルト層による堆積である。底面は平坦で南端部が低くなっている。時期は縄文時代と考えられる。

10号陥し穴状遺構（第7図、写真図版4）

調査区北側中央に位置し、V層で検出した。重複している遺構はない。平面形状は中央部が狭く、両端側が広がる形状を呈する。底面両端はオーバーハングしている。規模は開口部径が長軸439cm、短軸60~100cm、底部径が長軸419cm、短軸18~76cmで検出面から底面までの深さは117cmを測る。埋土は自然堆積で7層に分かれ、上位は暗褐色・褐色シルト、中~下位は黒褐色・褐色シルトを主体とする層である。時期は縄文時代と考えられる。

1号土坑（第7図、写真図版4）

調査区南端、東側の調査区境に位置し、トレンチ内のVI層で検出した。重複する遺構はない。平面形状は円形で規模は開口部径143×127cm、底部径72×70cm、検出面から底面までの深さは85cmで、開口部から底面中心に向かって狭く、播鉢状の形状を呈する。埋土は自然堆積で6層に分かれる。遺物が出土していないため、詳細時期は判然としないが、埋土の状況から縄文時代と推定される。

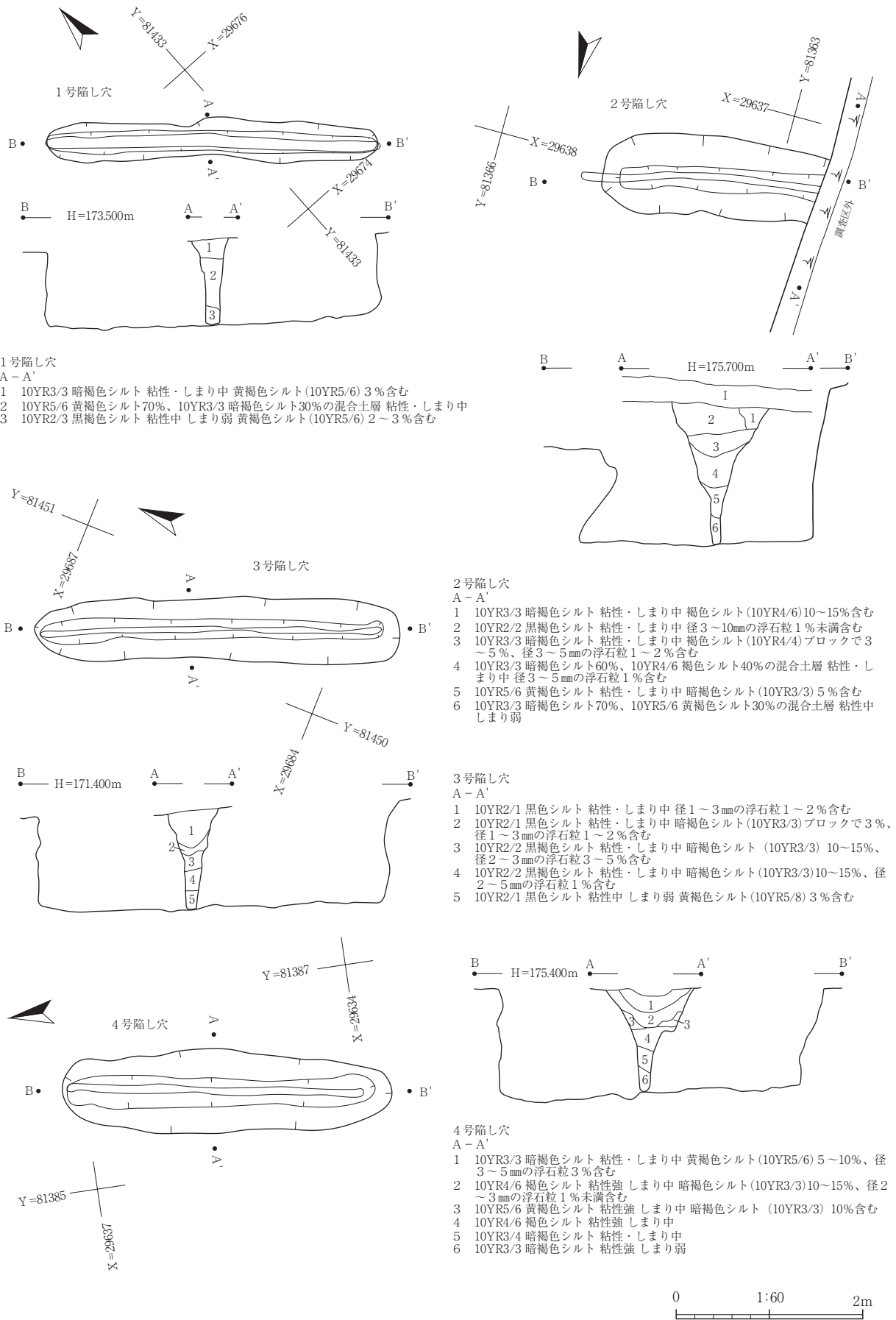
1号集石遺構（第7図、写真図版5）

調査区南端、東側の調査区境に位置し、V層で検出した。1号土坑に隣接するが重複関係はない。167×91cmの範囲で礫8個を検出した。礫の長さは10~51cmを測り、周辺から土器片が少量出土している。礫とV層の隙間には黄褐色シルト粒を含む黒褐色シルトが堆積しているが、礫を設置した際の掘方埋土かどうかは判然としない。時期は出土した遺物から弥生時代以前に属する。

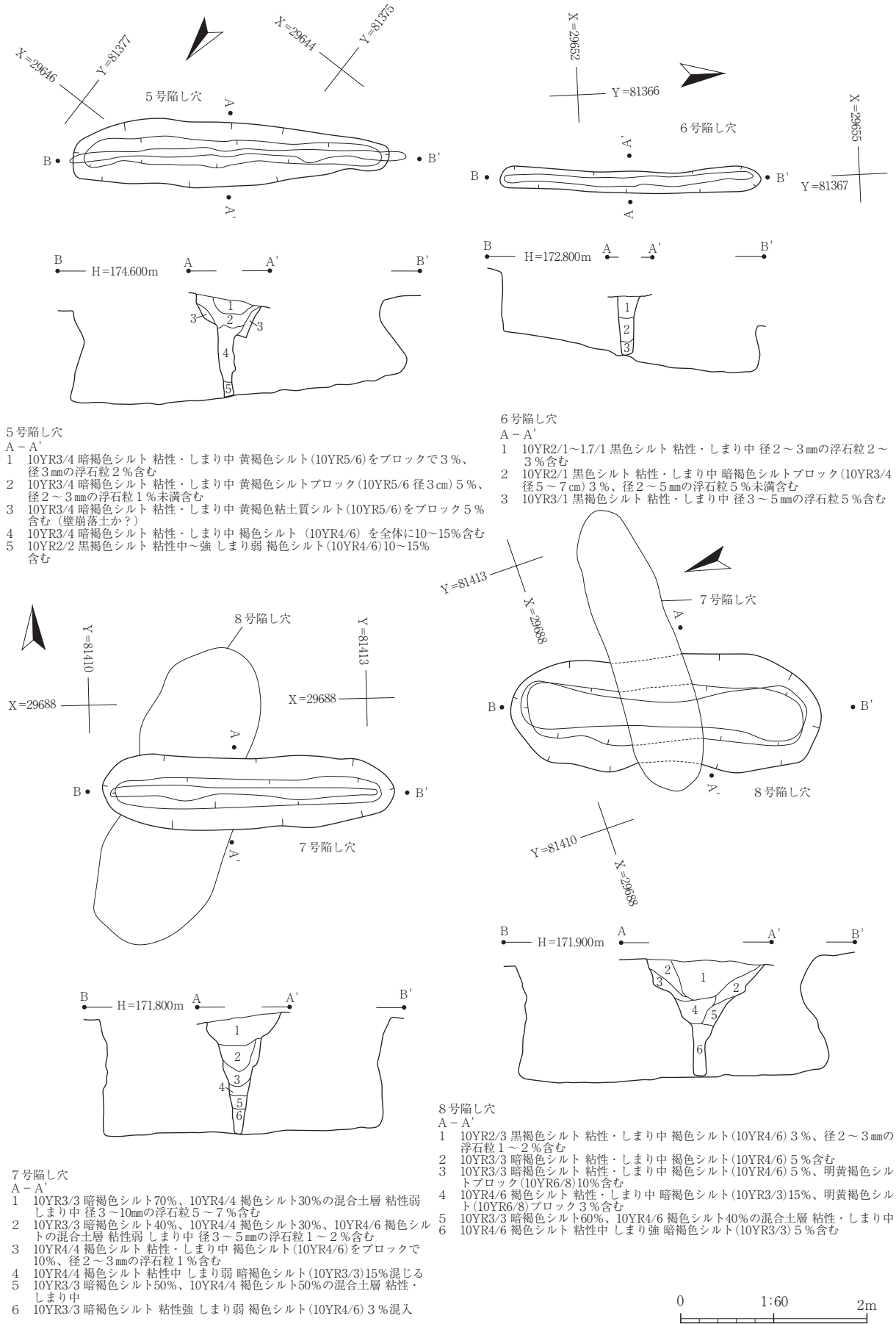
2号集石遺構（第8図、写真図版5）

調査区南端、東側の調査区境に位置し、V層で検出した。9号陥し穴状遺構と重複し、これよりも新しい。検出したのは礫2個のみであるが、東側の調査区域外に遺構が広がっていることから遺構の一部の可能性があると判断し、記録・掲載した。礫を設置する際の掘方は確認されておらず、出土遺物もないため、詳細時期については不明である。

(1) 木戸場遺跡

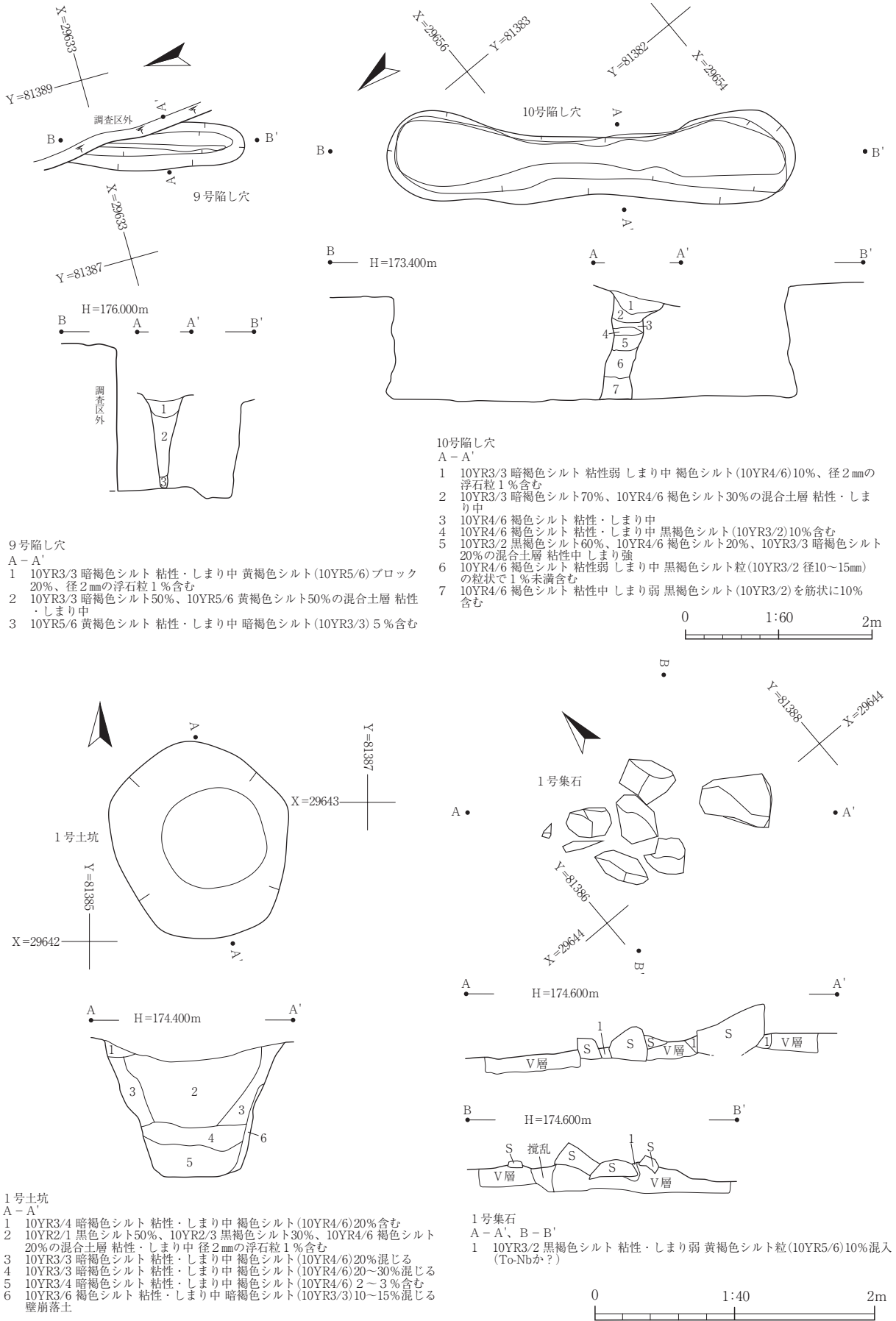


第5図 1~4号陥し穴状遺構

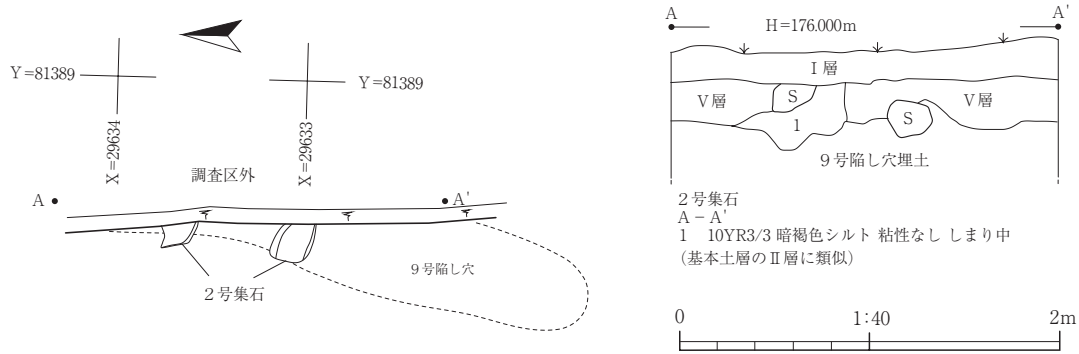


第6図 5~8号陥し穴状遺構

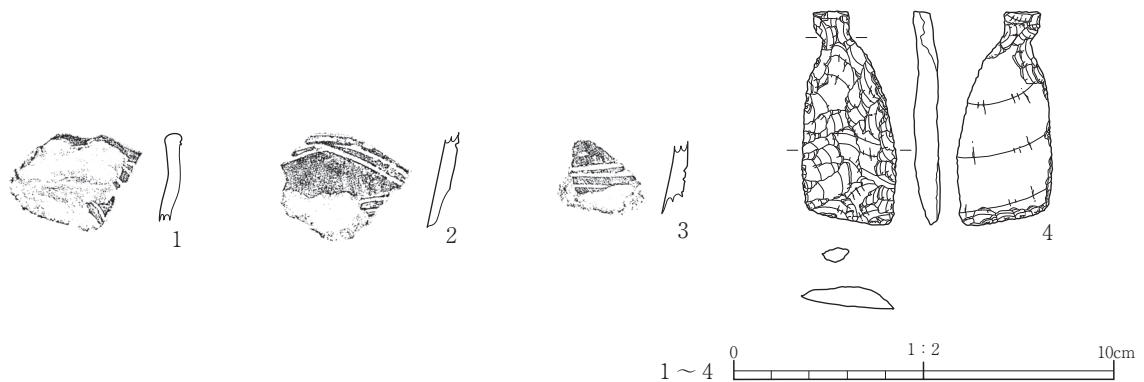
(1) 木戸場遺跡



第7図 9・10号陥し穴状遺構、1号土坑、1号集石遺構



第8図 2号集石遺構



第9図 出土遺物

表1 出土遺物一覧 (土器)

No	出土地点	層位	種別	器種	部位	調整等			その他
						内面	外面	底面	
1	1号集石遺構周辺	VI層上	弥生土器	鉢	口縁	-	沈線文	-	口縁頂部突起
2	1号集石遺構周辺	VI層上	弥生土器	鉢	口縁	-	沈線文	-	
3	1号集石遺構周辺	VI層上	弥生土器	鉢	口縁	-	沈線文	-	

表2 出土遺物一覧 (石器)

No	出土地点	層位	種別	器種	法量				その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
4	北東部トレンチ内	IV層	石器	石匙	5.7	2.5	0.5	9.4	

(2) 出土遺物

今回の調査で出土した土器は329.4gで主に弥生土器で大半が1号集石遺構周辺から出土した。図化・掲載したのは土器片3点と石器1点で、特徴については表1・2に記載した。

5 まとめ

調査の結果、縄文時代の陥し穴状遺構が検出されたことから、平成29年度調査区同様、狩猟域として活用されたことが明らかになった。他に弥生時代の土器が出土したことから同時代に生活領域の一部として利用されていた可能性が考えられる。

なお、木戸場遺跡令和2年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

〈引用・参考文献〉

(公財)岩手県文化振興事業団 2018「(4) 木戸場遺跡」『平成29年度埋蔵文化財調査報告書』(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集

(1) 木戸場遺跡



遺跡遠景・N→



調査区全景・上が南



基本土層・E→



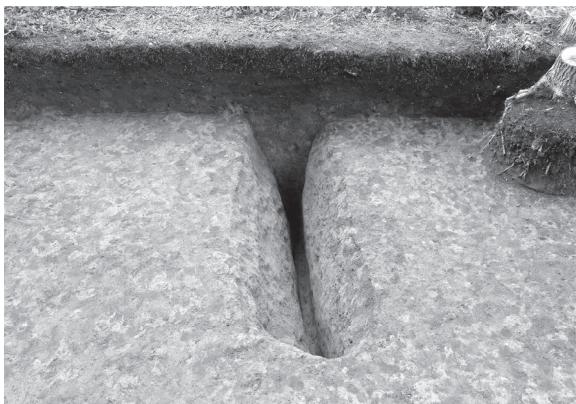
調査前風景・S→



1号陥し穴状遺構完掘・N→



1号陥し穴状遺構断面・N→



2号陥し穴状遺構完掘・E→



2号陥し穴状遺構断面・E→



3号陥し穴状遺構完掘・N→



3号陥し穴状遺構断面・N→

(1) 木戸場遺跡



4号陥し穴状遺構完掘・N→



4号陥し穴状遺構断面・N→



5号陥し穴状遺構完掘・E→



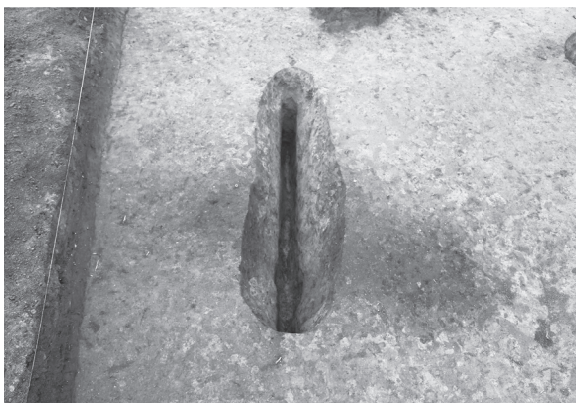
5号陥し穴状遺構断面・E→



6号陥し穴状遺構完掘・N→



6号陥し穴状遺構断面・N→



7号陥し穴状遺構完掘・W→



7号陥し穴状遺構断面・W→



8号陥し穴状遺構完掘・N→



8号陥し穴状遺構断面・N→



9号陥し穴状遺構完掘・SW→



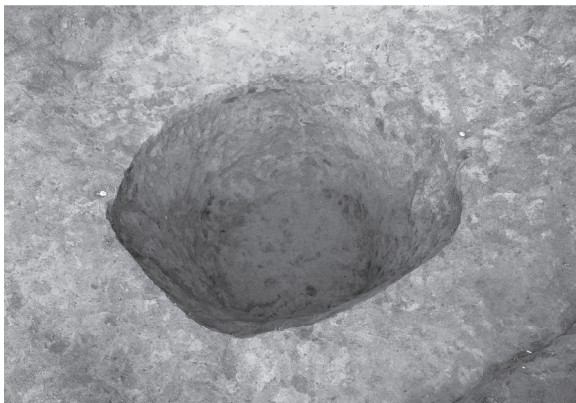
9号陥し穴状遺構断面・SW→



10号陥し穴状遺構完掘・N→



10号陥し穴状遺構断面・N→



1号土坑断面・W→



1号土坑断面・W→

(1) 木戸場遺跡



1号集石遺構検出状況・W→



1号集石遺構断面・SW→



1号集石遺構断面・NW→



2号集石遺構検出状況・W→



2号集石遺構断面・W→



調査区南側作業風景・N→



写真図版5 検出遺構4、作業風景、出土遺物

(2) 中平遺跡^{なかたい}

所在地	九戸郡野田村大字野田第13地割大平野地内	遺跡コード・略号	JG60-0258・NKT-20
委託者	国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所	調査対象面積	202㎡
事業名	三陸沿岸道路	調査終了面積	202㎡
発掘調査期間	令和2年7月16日～8月7日	調査担当者	星 雅之

1 調査に至る経過

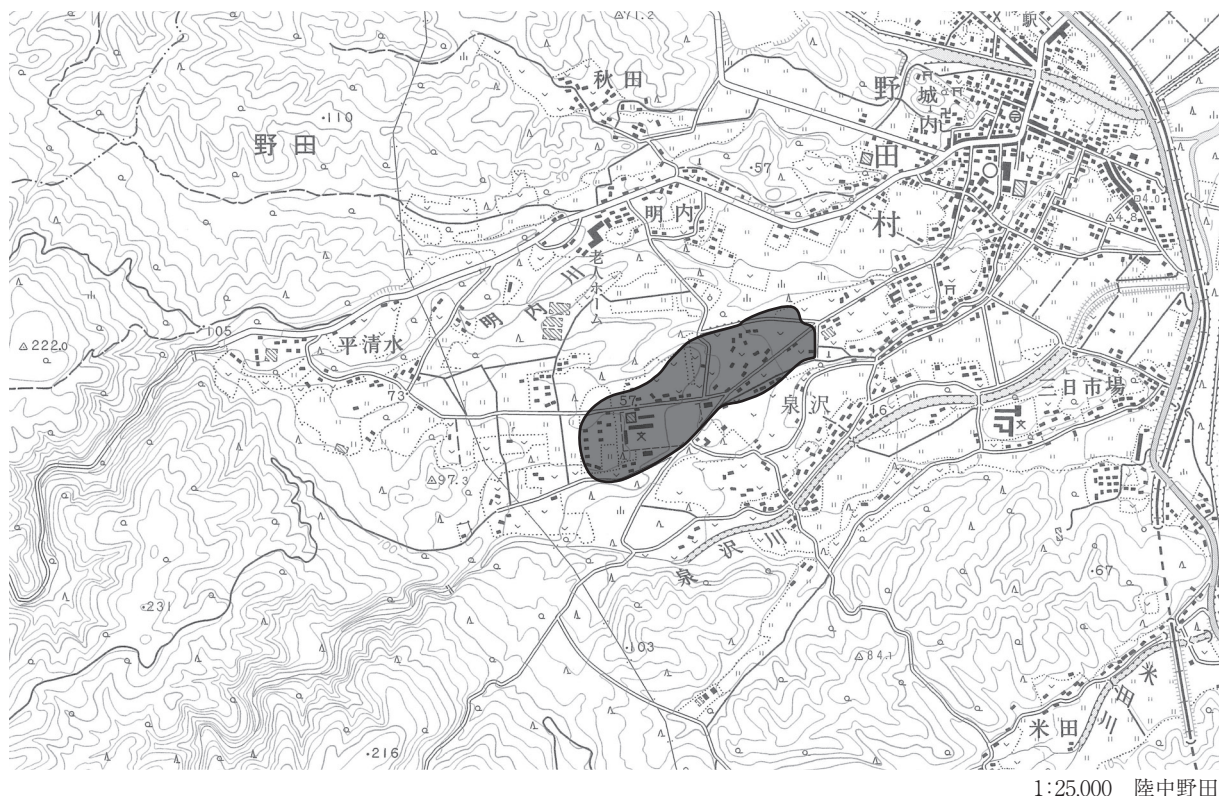
中平遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（普代～久慈）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成30年度にも隣接地の発掘調査を実施しており、今回新たに事業区域となった箇所は令和2年6月4日に現地確認が実施された。平成30年度の発掘調査状況及び今回実施した現地確認の結果に基づき、令和2年6月30日付け国東整陸一調第2号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会教育長あてに工事着手に係る通知（文化財保護法第94条）をしたところ、令和2年6月30日付け教生第64-58号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、野田村の中心地にある野田村役場から南西約900mに位置し、標高約60mで高位の海成段丘上から25m前後とやや低い河岸段丘に亘り、東西約850m、南北約200mに広がる。遺跡範囲の中で、高位の台地上にある野田中学校西側の村有林野約700aが「野田堅穴住居址群」として県指定史跡となっている。

今回の調査区は中平遺跡範囲の南東端付近で、標高25m前後、近隣には泉沢墓地がある。現況は現道（村道城内二又線）で、平成30年度当センター調査区の西続き部分である。

3 基本層序

調査区の状況は、現道建設時に削平を受け、調査区壁では埋蔵文化財の対象となる時代の旧表土や文化層の残存を確認できず、基本層序の設定に際しては過年度調査の基本層序（岩手文振 2020）を参考とした。なお、遺構の遺存状況から削平の度合いは調査区の東側ほど深く、西側に向かいやや浅いことも分かり、加えて西端付近には現道下位に旧道（昭和の道路）に伴う盛土層も確認された。

基本層序
I層：現表土
II層：黒色土
III層：暗褐色土
IV層：褐色土
V層：黄褐色ローム（地山）

調査区境で作成した第3図A-A'断面（写真図版3を参照）では、下位から1号陥し穴→2号溝→1号溝→旧道（昭和の道路）→現道（平成の道路）の順に各堆積層を確認できる。村道建設時に埋設された水道管も平成と昭和の新旧2本が上下に約40cmの高低差で検出された。旧道（昭和の道路）について補足すると、第3図の1b層とした黄褐色粘土層の上面付近が当時の道路面だった可能性が高く、また昭和の水道管は現状の地山面より深く埋設されており、検出遺構を各所で破壊している。調査区外北側の畑地や宅地及び調査区外南側の山林などの隣接地は、旧道の路面より標高が60～100cm高いことから旧道の周囲の土地は大規模な盛土が施され現在に至っていると推定される。

4 調査の概要

(1) 遺構

検出遺構は、縄文時代の陥し穴1基と時代不明の溝跡3条を検出した。

1号陥し穴状遺構

[位置・検出状況] 調査区西端で検出した。プランの続きは調査区外西に延びる。平面形状から溝状の陥し穴と判断される。[重複関係] 1・2号溝と重複し、それらより古い。[規模] 長軸長170cm以上で、短軸長28～70cmである。先端がやや先細りを呈し、中央付近に最大幅を持つ平面形状と推定される。深さについて、明確には掴めなかったが検出面から40cm前後と推定される。[埋土] 自然堆積である。埋土上位に基本層序II層系の黒褐色シルトが、中～下位にV層系の壁の地山崩落土などが堆積する。[出土遺物] なし。[時期] 縄文時代と判断されるが詳細は不明である。

1号溝

[位置・検出状況] 調査区西端から中央付近で検出された。調査区外西・東にプランは続く。[重複関係] 2号溝及び1号陥し穴状遺構より新しい。[規模] 把握できる長さは約18m、幅は開口部幅25～60cm、底部幅20cm前後である。深さは15cm前後を測る。底面はほぼ平坦である。[埋土] 自然堆積で黒褐～暗褐色シルトによる単層の箇所が多い。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

2号溝

[位置・検出状況] 調査区西端から東端まで、ほぼ全域に亘り検出された。調査区外北東・南西にプランは続く。[重複関係] 1号溝より古く、3号溝及び1号陥し穴状遺構より新しい。[規模] 把握できる長さは約27m、幅は開口部や底部を把握できる部分がなく厳密には不明であるが、開口部は120cm

前後、底部幅80～90cmと推定される。深さは15～25cmを測る。底面はほぼ平坦で断面形は浅鉢状を呈する。[埋土] 水成堆積である。埋土上位に暗褐色シルト、中～下位に黄褐色粘土質シルトブロックが横位に線状に堆積し、最下位に暗褐色シルトが堆積する。黄褐色粘土質シルトは、横方向に太めの線状と細かい筋状の堆積が認められる。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

3号溝

[位置・検出状況] 調査区中央から西部で検出された。調査区外北に延びる。また、溝の東部は途中でプランが途切れるが、元々途切れるように作られたのではなく、村道建設時の削平で失われていると推定される。[重複関係] 2号溝より古い。[規模] 把握できる長さは約16.5m、幅は開口部を把握できる部分はないが、E-E' 断面付近での底部幅は90cm前後を測る。深さは明確ではないが15～30cmである。[埋土] 水成作用による自然堆積である。埋土上位に暗褐色シルト、中～下位は暗褐色シルト主体に黄褐色粘土質シルトが混じる。中～下位で観察される黄褐色粘土質シルトは、暗褐色シルト内で幾つか筋状に混入が認められ、特徴的な様相に見て取れる。洪水などの現象により堆積した可能性が窺える。[出土遺物] なし。[時期] 不明である。

(2) 遺物

出土遺物は、古代の土師器片3点と時期不明の陶器片2点である。No.1～3の土師器はD-D' ベルト～E-E' ベルトまでの空間において、溝の検出作業時に出土した。3点とも摩滅した小破片であり詳細は分からず、平安時代の甕と推定するに留める。No.4・5の陶器片はF-F' ベルト付近で昭和の水道管の据え方土から出土。水甕の破片と推定される。時期は明確には判別できないが、近現代の可能性もある。

5 まとめ

今回の調査区は中平遺跡範囲の南東端付近に相当する。遺構・遺物共に僅少であった。検出遺構は縄文時代の陥し穴と時期不明の溝跡である。以下にまとめてみる。

平面形が溝状を呈する陥し穴を1基検出した。縄文時代と想定されるが、多くを言及できる状況にはない。両端がやや先細り、中央付近に最大幅を持つ形状と推定される。近接地である平成30年度調査の報文では幾つかの列に並んだ配置の可能性が指摘されている。

検出された溝は、古い方から3号溝→2号溝→1号溝の順をみることを確認した。3条とも北東～南西の同じ方向に延び、各所で重複関係を示す。同時期存在ではないが、作り替えなどによる変遷と捉えれば同様の用途や性格を担う溝であった可能性もある。時期について、その下限は旧道（昭和の道路）より確実に古いが、時期の上限は言及できない。現在の道路にほぼ平行することから、あるいは過去の道路に伴う道路側溝の可能性もある。補足として、平成27年度調査で時代不明とされているSD01溝跡とは、延びる方向はほぼ同じであるが、直接の延長部分とは思われない。

なお、中平遺跡令和2年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

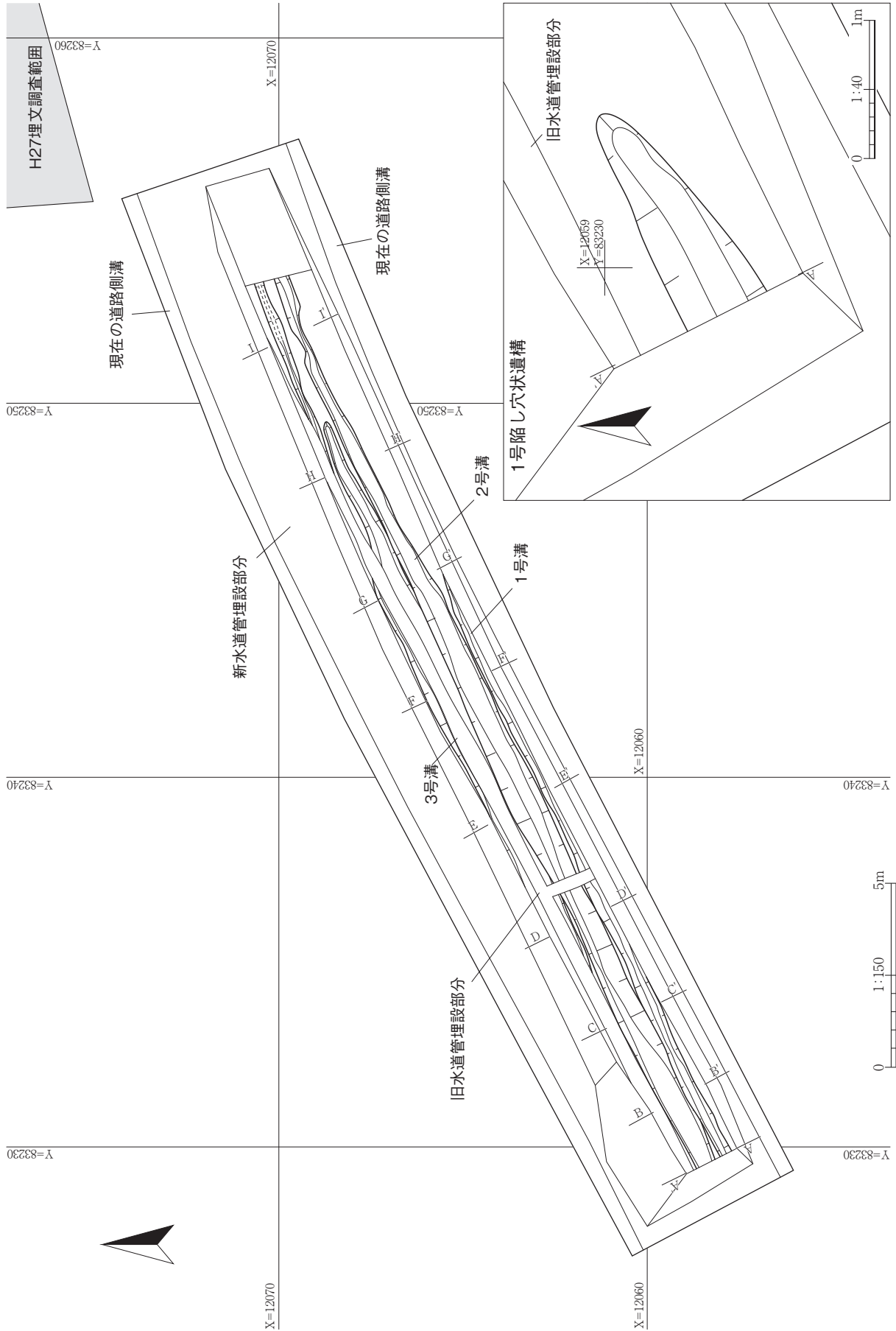
〈引用・参考文献〉

野田村 1992『野田村誌（通史資料）』

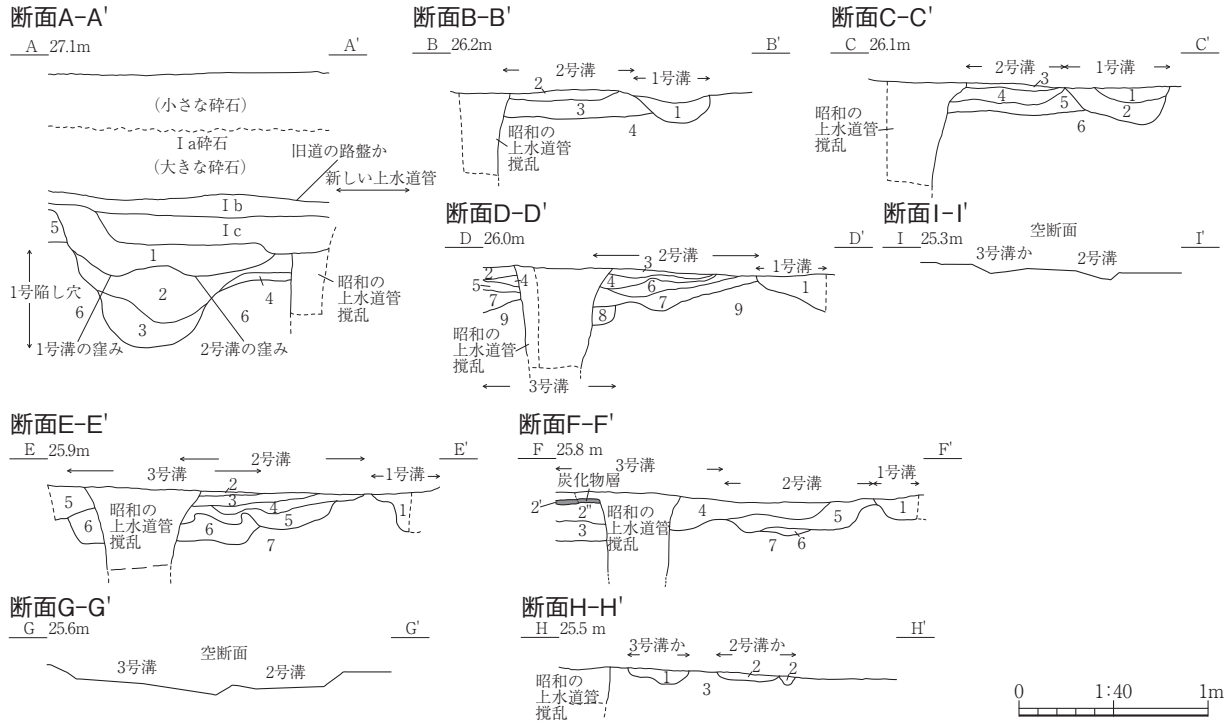
野田村教育委員会 2013『中平遺跡発掘調査報告書-143-』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

野田村教育委員会 2018『大平野遺跡第2次・中平遺跡第13次・14次発掘調査報告書』野田村埋蔵文化財発掘調査報告書第8集

岩手県文化振興事業団 2020『中平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第710集



第2図 検出遺構(1)



- 断面A-A'
- I a 道路砕石層 上部に小さな砕石、下部に大きな砕石を敷設 (平成に敷設か)
 - I b 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 旧道の路盤か
 - I c 小さな砕石層 (昭和に施工か)
 - 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 中水成堆積
 - 1・2号溝埋土、いずれも同時に埋没したように見える
 - 2 I層に10YR5/6黄褐色粘土質シルトを混入する 粘性やや弱締まり中 水成堆積
 - 1号陥し穴埋土
 - 3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1号陥し穴埋土
 - 4 3層とほぼ同じ、水成堆積
 - 5 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎
 - 6 10YR5/6黄褐色粘土質シルト 粘性やや弱 締まりやや密

- 断面E-E'
- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1号溝埋土
 - 2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2号溝埋土
 - 3 10YR4/6褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 盛土か (地山混じり)
 - 2号溝埋土
 - 4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 2号溝埋土
 - 5 10YR3/3暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトを筋状に水成堆積する
 - 2号溝埋土
 - 6 10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂質シルトを筋状に水成堆積する (深みか)
 - 3号溝埋土
 - 7 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

- 断面B-B'
- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1号溝埋土
 - 2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 水成堆積 2号溝埋土
 - 3 2層に10YR5/6黄褐色粘土質シルトの地山を水成堆積 2号溝埋土
 - 4 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

- 断面F-F'
- 1 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 1号溝埋土
 - 2' 炭化物層 厚さ2cmの炭化物を堆積 北側別遺構の埋土か、もしくは3号溝埋土
 - 2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 北側別遺構の埋土か、もしくは3号溝埋土
 - 3 10YR5/6黄褐色砂に2'層を筋状に水成堆積 北側別遺構の埋土か、もしくは3号溝埋土
 - 4 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎~中2'層よりやや明るい
 - 2号溝埋土か
 - 5 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2号溝埋土か
 - 6 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まり中 水成堆積 2号溝埋土か
 - 7 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

- 断面C-C'
- 1 10YR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1号溝埋土
 - 2 10YR4/6褐色シルトと5/6黄褐色砂質シルトの混合土 粘性やや弱 締まりやや疎
 - 1号溝埋土
 - 3 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2号溝埋土
 - 4 10YR5/6黄褐色粘土質シルトに10YR3/4暗褐色シルトを混入して水成堆積する
 - 2号溝埋土
 - 5 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎を水成堆積する
 - 2号溝埋土
 - 6 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

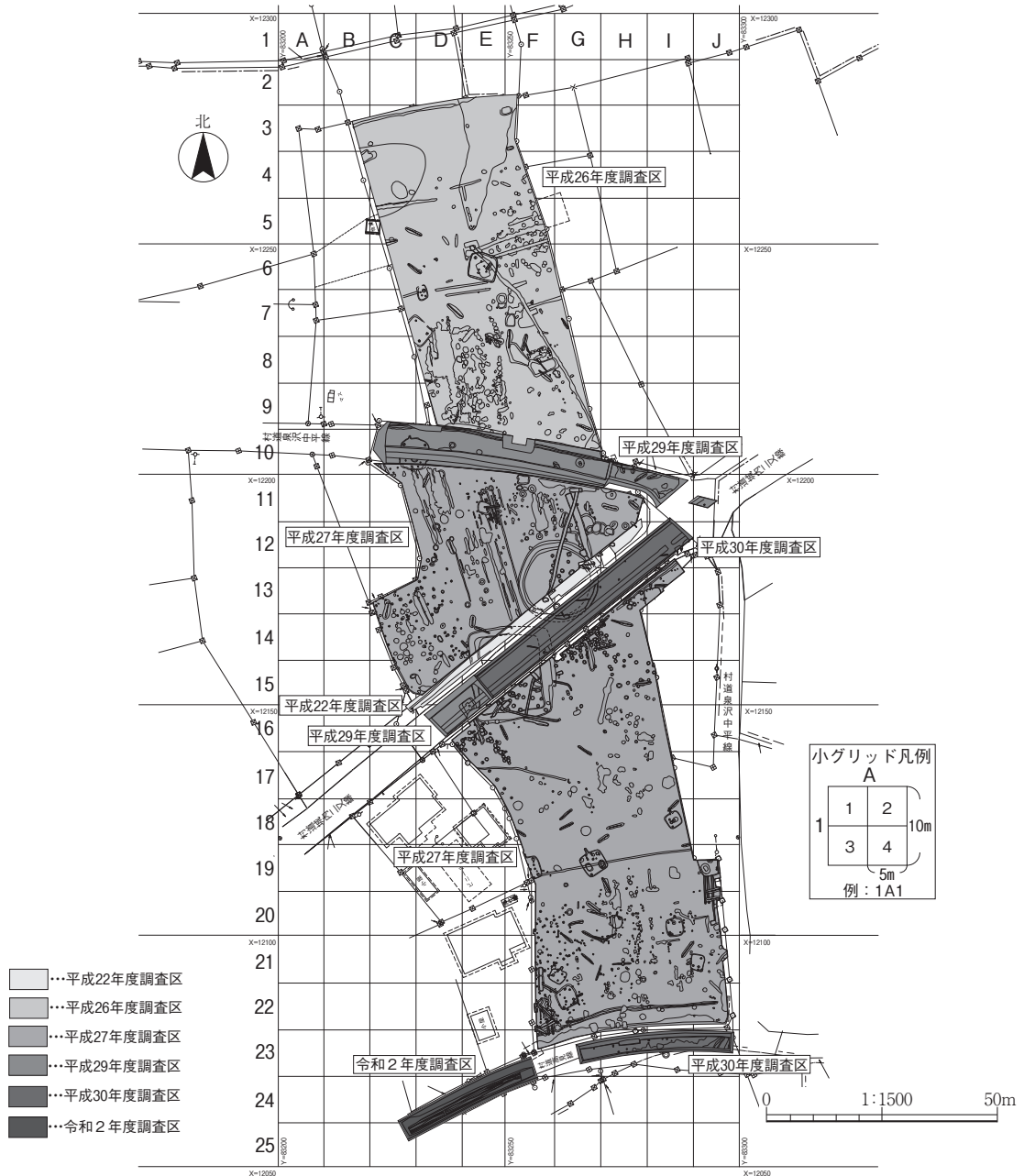
- 断面H-H'
- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 10YR5/6黄褐色砂質シルトを挟んだ水成堆積層 3号溝か
 - 2 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 水成堆積 2号溝か
 - 3 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

- 断面D-D'
- 1 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 1号溝埋土
 - 2 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2号溝埋土
 - 3 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2号溝埋土
 - 4 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 地山再堆積 (水成堆積)
 - 2号溝埋土
 - 5 10YR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2層とほぼ同じ
 - 2号溝埋土
 - 6 10YR3/4暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2号溝埋土
 - 7 10YR3/3暗褐色シルト 粘性やや弱 締まりやや疎 2号溝埋土
 - 8 10YR3/4暗褐色シルトに10YR5/6黄褐色砂を水成堆積する 粘性やや弱
 - 締まりやや疎 3号溝埋土
 - 9 10YR5/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 締まりやや密 地山

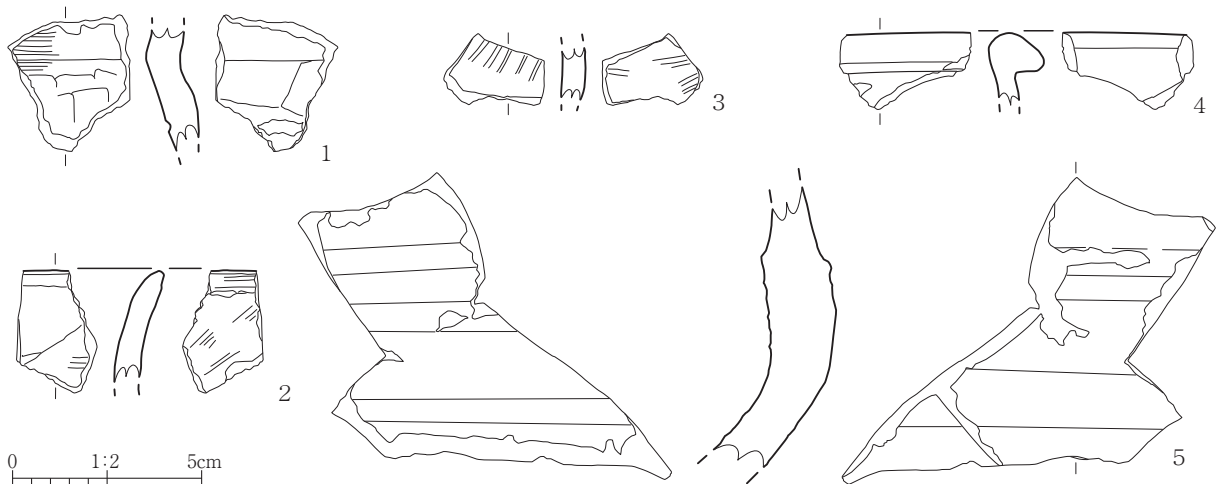
- 断面G-G'・断面I-I'
- 注記なし

第3図 検出遺構 (2)

(2) 中平遺跡



第4図 年度別調査区位置図



第5図 出土遺物



中平遺跡空撮（東から）



中平遺跡空撮（直上 ※上が南）

(2) 中平遺跡



1・2・3号溝全景（西から）



1・2号溝全景（西から）



2号溝全景（東から）



1・2・3号溝検出状況（東から）

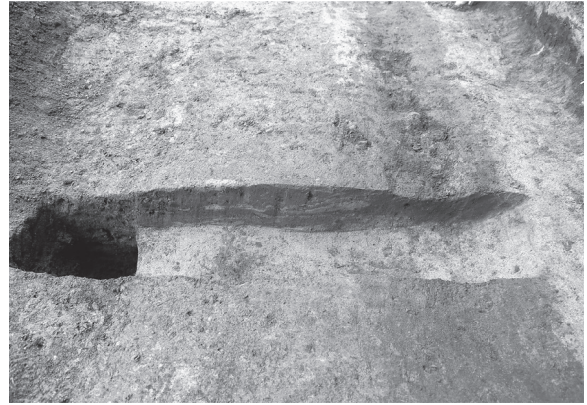


検出作業（西から）

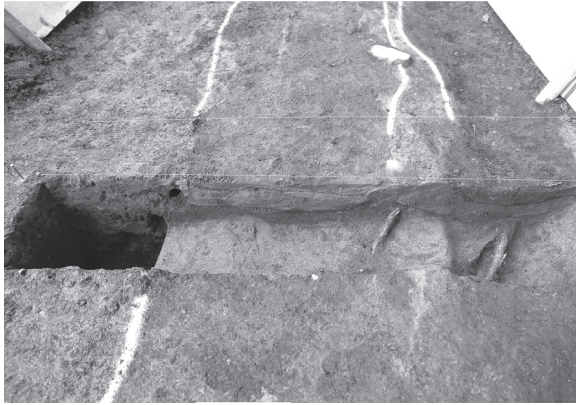
写真図版2 1・2・3号溝



A-A'断面 (東から)



B-B'断面 (西から)



C-C'断面 (西から)



D-D'断面 (西から)



E-E'断面 (西から)



F-F'断面 (西から)



H-H'断面 (西から)



I-I'断面 (西から)

(2) 中平遺跡



1号陥し穴 (東から)



調査前現況 (東から)



調査前 (西から)



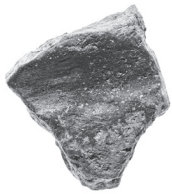
調査前 (西から)



調査区遠景 (北東から)



調査区外西側 (東から)



1



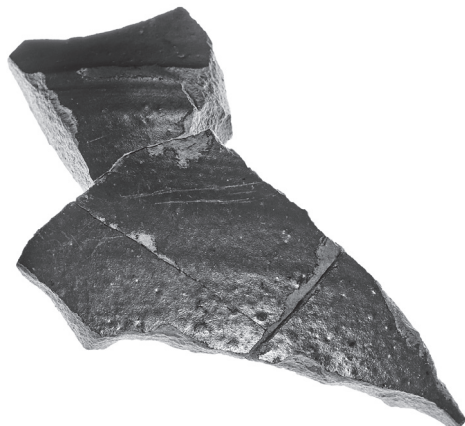
2



3



4



5

写真図版4 調査風景・出土遺物

(3) 境^{ざかい}・山下^{やました}遺跡

所在地	奥州市江刺稲瀬字山下616-7ほか	遺跡コード・略号	ME86-0069、ME86-1123・SA・YS-19・20
委託者	県南広域振興局土木部道路整備課	調査対象面積	730㎡
事業名	一関北上線山下地区地域連携道路整備事業	調査終了面積	730㎡
発掘調査期間	令和元年9月1日～11月11日、 令和2年4月8日～5月27日	調査担当者	村上 拓・溜 浩二郎・野中裕貴・ 佐藤敬太

1 調査に至る経過

境・山下遺跡は、主要地方道一関北上線山下工区地域連携道路整備事業の事業区域内に存在することから、発掘調査を実施することとなったものである。

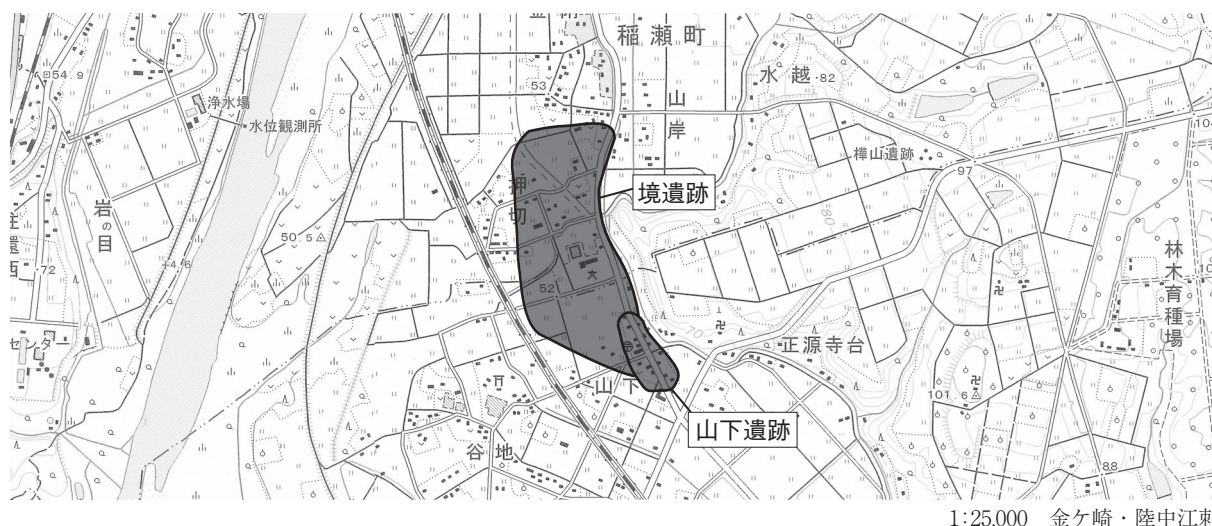
主要地方道一関北上線は、一関市を起点とし、北上市に至る幹線道路であり、沿線住民等の生活道路としての役割も担っている重要な路線である。

事業対象箇所は、沿道に人家が連担し、幅員狭小の隘路区間となっているほか、一般県道広瀬三ヶ尻線との交差点の交差角不良等により、交通安全上危険な状況となっていることから、本工区の整備により、安全で円滑な交通の確保を図るものである。

境・山下遺跡は、岩手県教育委員会作成の県遺跡台帳登録済の境遺跡及び山下遺跡からなる遺跡で、周知の遺跡である。当事業の施行に係る埋蔵文化財の取扱いについては、岩手県県南広域振興局土木部から岩手県教育委員会に対し、平成31年4月17日付け県南広土第137号「埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により、試掘調査の依頼を行った。依頼を受けた岩手県教育委員会は令和元年5月14日から同年5月15日にかけて試掘調査を実施し、工事着手するためには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、令和元年5月24日付け教生第98号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当部に回答した。

その結果を踏まえて、当部は岩手県教育委員会と協議を行い、発掘調査を公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。これにより令和元年9月2日付けで県南広域振興局長と公益財団法人岩手県文化振興事業団理事長との間で委託契約を締結し、境・山下遺跡の発掘調査を実施することとなった。

(県南広域振興局土木部道路整備課)



第1図 遺跡位置図

2 遺跡の位置と立地

遺跡は、JR 東北本線六原駅の北東約2.3kmに位置し、北上川左岸に広がる沖積面（標高50m前後）に立地する。北上市域では境遺跡、奥州市域では山下遺跡としてそれぞれ登録されているが、本質的には一連の遺跡と考えられる。当該事業に係る調査対象範囲が両市域に連続することから、今回の調査においては便宜上「境・山下遺跡」と呼称している。

令和元年度は事業対象である県道の西縁に沿って、北上市立照岡小学校校地の南東隅から南に約150mの区間の600㎡を調査した。調査区の幅員は全体を通して2～4mと狭小であり、調査区壁面の保全等、安全管理上の観点から、掘削深度は概ね-150cmまでとした。これより下位の堆積状況については、要所に設けた試掘坑によって確認を行った。

令和2年度は、前年度調査区の北側に連続する市道接続部（丁字路）付近の約130㎡を対象として調査を行った。

3 基本土層（第7・8図）

1～5区の調査では3区の東壁断面と、やや様相の異なる6区は別途調査区壁面において土層観察を行った。現県道及びこれに付帯する歩道等の施工により、調査範囲には現地地表下50cm前後まで客土層（0層）が堆積している。この下位のI層は現表土に相当し、下部にグライ化層（水田耕土か）の認められる地点では上部と区分した（I a・I b層）。II層は褐色土層で木炭粒の混入が目立つ。近世以降の遺物を包含する旧表土層である。III層は暗褐色粘質土層で、間に洪水堆積層とみられる黄褐色粘土層を挟む。この黄褐色粘土層はクラックや草根痕が顕著であり、またブロック状に崩壊し二次堆積の様相を呈する部分も多く認められる。氾濫ののち湿地化を経て（あるいはこれを繰り返して）、その後、人間活動が展開される地表面を形成したものと推測される。遺構・遺物から、古代～中世に相当する土層と考えられる。III層より下位の土層は一括してIV層とした。1区では褐色粘土、5区では褐色シルトで、調査範囲の中央付近にあたる2～4区では、褐色～暗褐色砂層となっている。調査範囲は南西に向かってごく緩く傾斜し、かつ、調査範囲の中央部付近はさらに低くなっていたものと考えられる。2～4区では、地表下350cm前後まで同様の砂質土層の堆積が連続することを確認し、この深度で湧水も観察された。遺構の分布は、相対的に高標高でIV層が粘土質を帯びる1区周辺を主体とするものと考えられる。6区では客土下に古代と考えられる堆積層（I・II層）、その下に洪水堆積層（III層）を挟み、縄文土器が出土した暗褐色土層（IV層）を確認した。

4 調査の概要

調査対象は一関北上線の西縁に沿った南北に細長い範囲で、この中には既設電柱や市道接続部などの掘削不能箇所も点在するため、トレンチが断続的に縦列するような調査区配置となっている。令和元年（2019年）度は北から順に1～5区を設定し、令和2年（2020年）度範囲を6区とした。

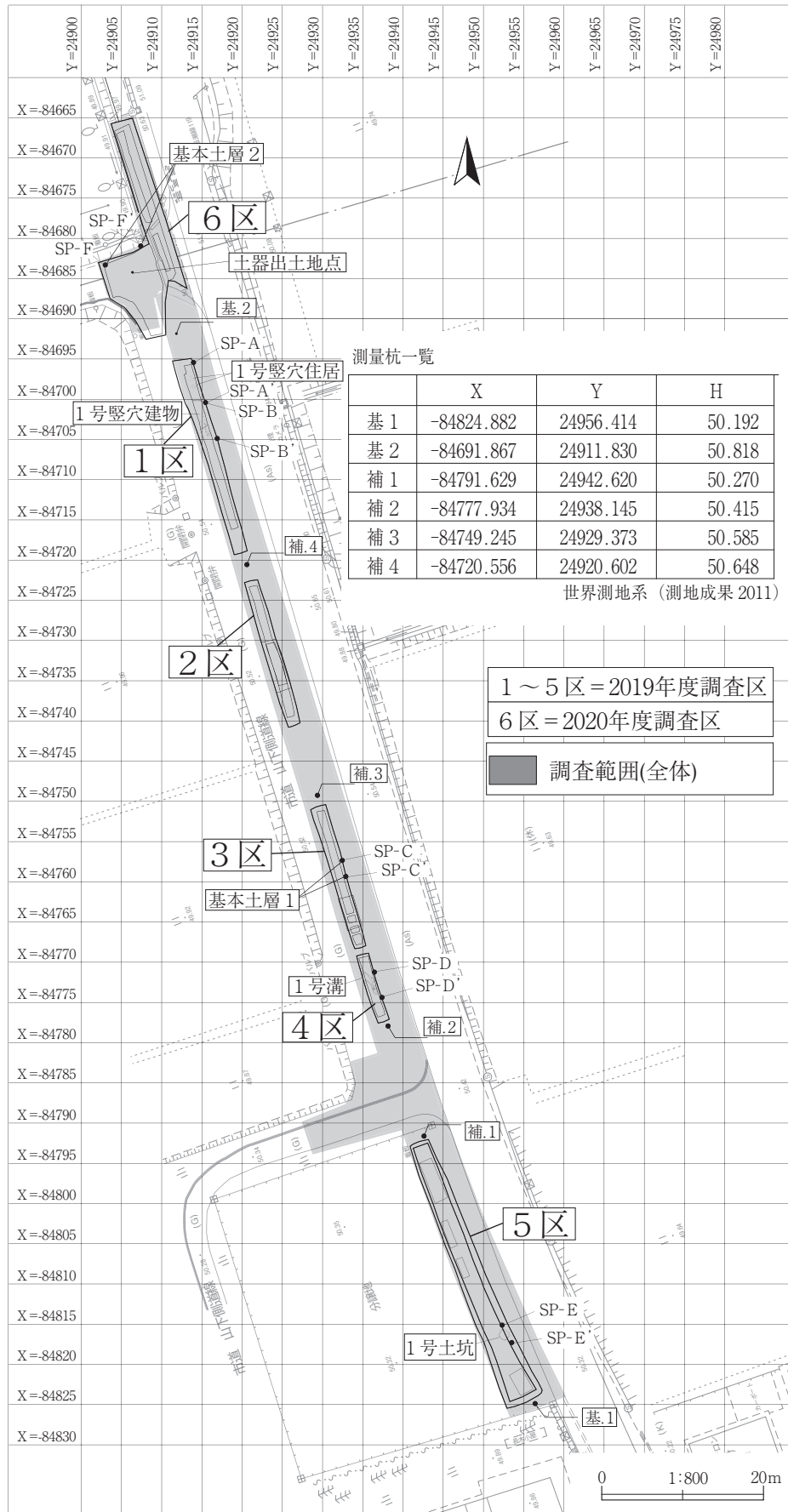
基準点は令和元年度調査区の南北両端に基1・基2を設置し、これに補1～4を加えた。1区北端の基2と4区南端の補2の間隔は90mで、これを30mごと3等分した地点に補3・補4が位置する。基1・補1は5区・6区の調査に用いた。各点の配置と座標は第2図に示している。

(1) 遺構

1号竪穴住居（第3図、写真図版3・4）

〔位置・検出状況〕 1区北端、X=-84697・Y=24914付近に位置する。現地地表下100cm前後において、土器片及び焼土の分布地点として検出した。

〔形状・規模〕 底面幅120cm弱のトレンチ内で検出したものであり、精査したのは遺構のごく一部に限られる。このため遺構本体の全体形状は不明である。調査区東壁断面には南側壁面の立ち上がり



第2図 調査区全体図

(3) 境・山下遺跡

認められる。また、壁面直下から北に380cm以上水平に連続する平坦面が床面とみられる。壁面上端から床面までの残存深度は約30cmである。床面上には炉跡及び小土坑を伴っている（後掲）。

〔埋土・堆積状況〕 本遺構の埋土は断面A-A'：1～3層で、にぶい黄褐色土を主体とした自然堆積層で構成される。Ⅲa層を切り、I b層に切られている。埋土最上部の1層はⅡ層相当とみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕 床面付近まで掘り下げた時点で存在を認識した遺構であるため、壁については、外傾する立ち上がりを断面に確認できるのみである。床面は平滑に整い全体に弱い硬化が認められ、径5mm内外の木炭細片の散布が顕著にみられる。壁面直下に壁溝は伴わないが、約60cm内側の床面上で2つの小土坑（P1・2）を確認した。P1は深さ20cm程、P2は40cm以上（最深部は区外に延び未確認）で、両者の間を浅い溝状の掘りこみが連絡している。両小土坑と小溝は、自然堆積による一連の土層によって埋没していることから、並行して開口状態にあり、その後同時に埋没を開始したことが理解される。小土坑には柱痕跡や掘方埋土（裏込め土）は認められなかった。よって柱穴以外の可能性も留保しておきたい。P2の埋土上部からは、周辺から転落したとみられる砥石・大形礫（鉄床石か）・土器・焼土塊・炭化物等がまとまって出土しており、後掲炉跡との関連性がうかがえる。〔炉跡〕 壁面から200cm内側の床面上に、炉跡様の焼土生成箇所を検出した。平面形は110×65cmの楕円～瓢形を呈し、赤変深度は8～4cmである。断面b-b'付近の被熱が強く、軟岩状に硬化している。

〔重複〕 精査範囲に他の重複遺構は認められなかった。

〔遺構の時期〕 出土遺物の年代観から、平安時代前期が想定される。

〔出土遺物〕（第9図、写真図版7） 土師器坏・甕、須恵器坏・甕、砥石・鉄床石、刀子等が出土した（5～13）。出土土器類の総量は607.5gである。

1号竪穴建物（第4図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕 1区北部、X=-84703・Y=24916付近に位置する。現地表下110cm前後において、炭化物が面的に集中する地点として認識したのち、小土坑の列状配置と土層断面の検討から竪穴建物と判断したものである。

〔形状・規模〕 底面幅100cm前後のトレンチ内で検出したものであり、精査したのは遺構のごく一部に限られる。また床面付近まで掘り下げた段階で存在を把握したため、壁を面的に把握することはできなかった。調査区東壁断面には南北壁面の立ち上がりが認められ、また西側壁が想定される位置に柱穴状小土坑が列状に並ぶことから、平面形は概ね方形を呈するものと推測される。断面にみられる南北両壁間の長さは3.2m、壁上端から床面までの残存深度は30cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕 本遺構の埋土は断面B-B'：1～2層である。Ⅲa層を切り、Ⅱ層に切られている。床面直上には炭化物細片による薄層が面的に広がり、その上位は人為層（1層）で一気に埋め戻されている。

〔壁・床面・柱穴など〕 土層断面に観察される壁面は直立して立ち上がっている。南西隅付近に残存する床面は平坦に整い、弱い硬化が認められる。南西隅の壁直下には壁溝と柱穴（P4）を持ち、これに連続して西辺沿いに柱穴（P1～3）が並んでいる。

〔炉跡〕 精査範囲においては検出されない。

〔重複〕 精査範囲に他の重複遺構は認められなかった。

〔遺構の時期〕 遺構の形態から、中世に属するものと考えられる。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

1号溝（第5図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕 4区中央、X=-84772・Y=24936付近に位置する。Ⅲ層上面において、不明瞭な

暗色帯として検出した。

〔形状・規模〕 調査区に対し斜交して北西－南東方向に走行する。検出した全長は3.2m、幅は80cm前後、残存深度は24～30cmである。断面形状は浅いU字形を呈する。

〔埋土と堆積状況〕 埋土はⅢ層土を主体とし、混入する黄褐色土ブロックの量比により細分される。壁面を構成する周囲の堆積層（Ⅲ層相当）と埋土の差異は判然とせず、精査によって本来形状を復元し得たかについては必ずしも確証が持てない。また、南東端部の底面では、径20cm強の河床礫と炭化物が集中する黒褐色土範囲が認められた。この部分も同様に、形状自体が不明瞭であることから、本遺構に伴う一段深い部分、あるいは本遺構が切る古期の別遺構である可能性を留保しておきたい。

〔重複・関連遺構〕 精査範囲に重複する他の遺構はない。

〔遺構の時期〕 帰属時期を示す根拠は得られていない。

〔出土遺物〕（第9図、写真図版7） 縄文時代土器片（3）ほか、少量の細片が出土している。

1号土坑（第6図、写真図版5）

〔位置・検出状況〕 5区南部、X=-84816・Y=24953付近に位置する。Ⅳ層上面において隅丸方形の混ブロック土範囲を検出、調査区壁面に同層の立ち上がりを確認した。

〔形状・規模・所見〕 平面形は隅丸方形で、壁は直立または僅かに内湾して立ち上がる。底面径は110×100cm、壁上端からの残存深度は110cmである。

〔埋土・堆積状況〕 本遺構の埋土は断面E-E'：3層である。壁面の上端が不明瞭だが、埋土はⅡ層土及びⅢ層以下のブロックからなることから、Ⅱ層中に構築面をもつものと推測される。下部から上部まで一様のブロック層であり、人為によって一気に埋め戻されたものと考えられる。

〔重複・関連遺構〕 直接重複する遺構はない。

〔遺構の時期〕 埋土の様相が1号竪穴建物に類似し、また構築面も同層位上面が想定されることから、中世またはそれ以降と考えられる。

〔出土遺物〕 出土遺物はない。

（2）出土遺物（第9図、写真図版7）

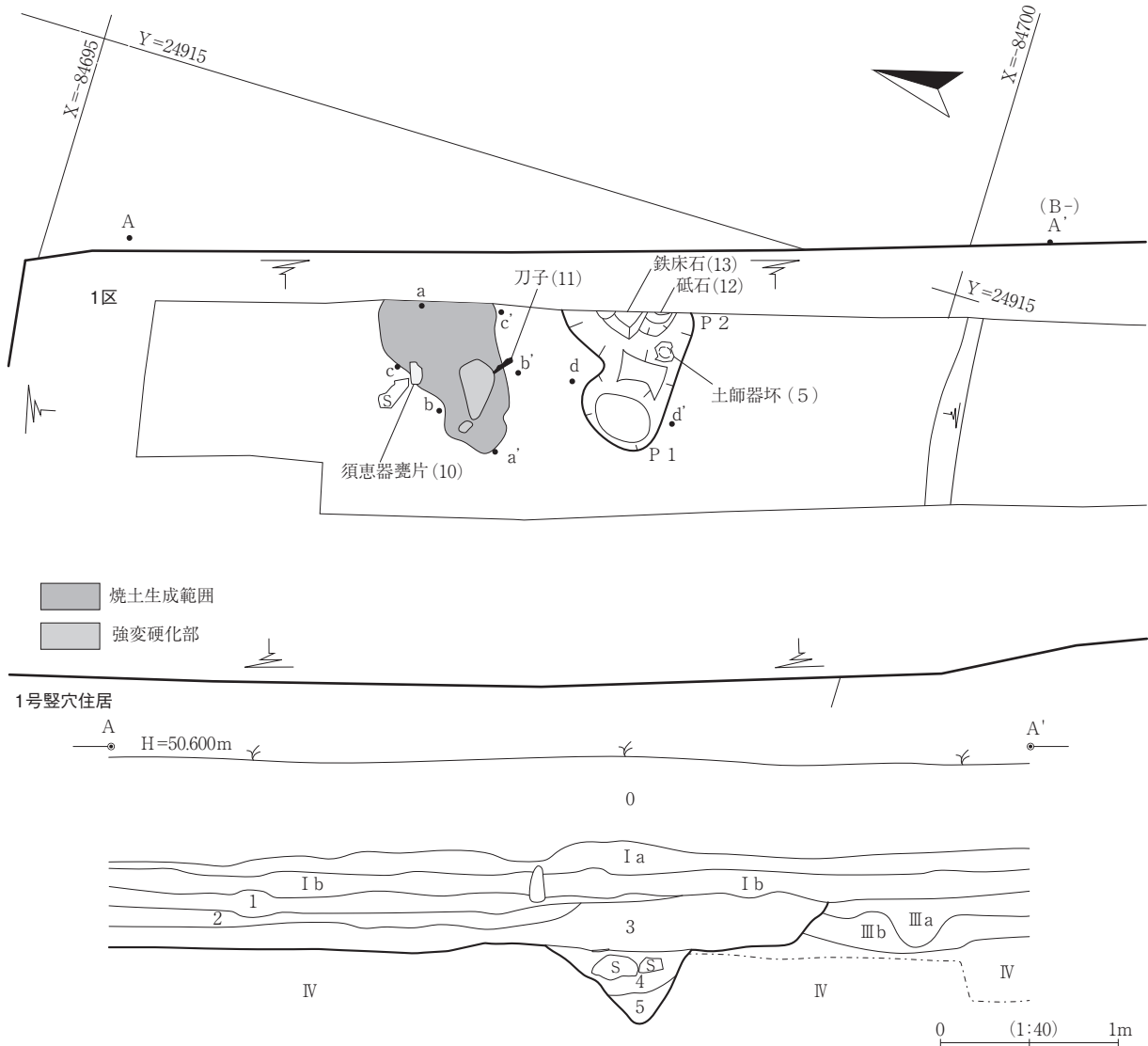
遺物の出土量は土器類680g、石器類12,347g、その他8.5gである。調査区別では1区が大半を占め、1号竪穴住居から出土した平安時代前期の遺物が顕著で、他には3・6区から二次的な堆積に伴うものと考えられる少量の縄文土器片が出土している。図化・掲載した遺物は13点で内訳は縄文土器4点（1～4）、土師器坏2点（5・6）、土師器甕1点（7）、須恵器坏1点（8）、須恵器甕2点（9・10）で土器類はいずれも破片である。他に刀子1点（11）、石器2点（12・13）。

5 まとめ

調査の結果、平安時代前期の遺構・遺物が検出されたことから、集落跡の一部であることが明らかとなった。また、1号竪穴建物・1号土坑の存在から中世にも場所として利用されていた可能性が考えられる。他に縄文時代の土器が出土したことから同時代に生活領域であったと考えられるが、今回の調査区では散発的な出土に留まるため、詳細については判然としない。

なお、境・山下遺跡令和元年度・同2年度調査に関わる報告はこれをもって全てとする。

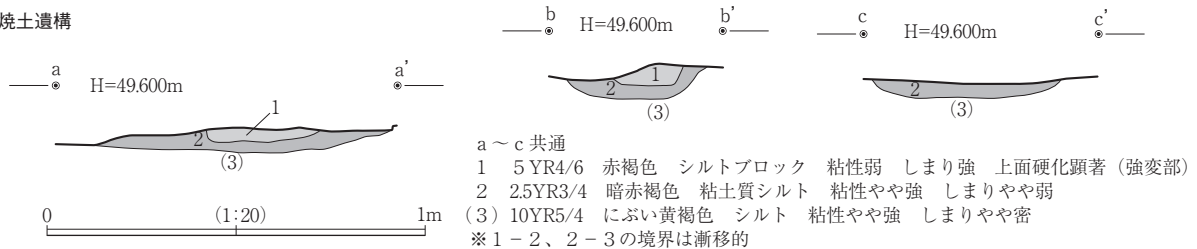
(3) 境・山下遺跡



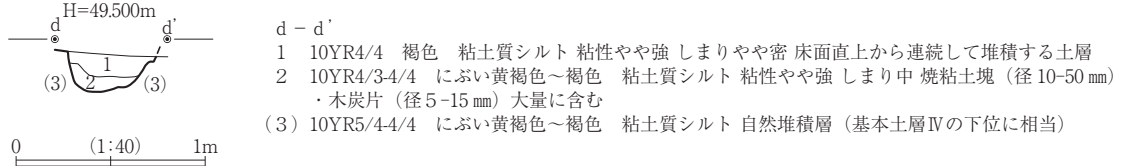
A - A' 【1区東壁断面（1号竪穴住居付近）】

- 1 10YR3/3-3/4 暗褐色 粘土質シルト 粘性中 しまりやや密 炭粒(径5mm)微 黄褐色土ブロック(径10-20mm)少 II層類似土が主体
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり密 黄味強い 黄褐色土ブロック層
 - 3 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密 2層に似るがやや暗く、かつシルト質
 - 4 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 粘性強 しまり中 黄褐色土ブロック少 径20-30cmの被熱礫含む
 - 5 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 粘性強 しまり中 黄褐色土ブロック多 焼粘土塊・炭片多量に含む P1埋土下部と同じ状況
- ※ 4・5:P1埋土

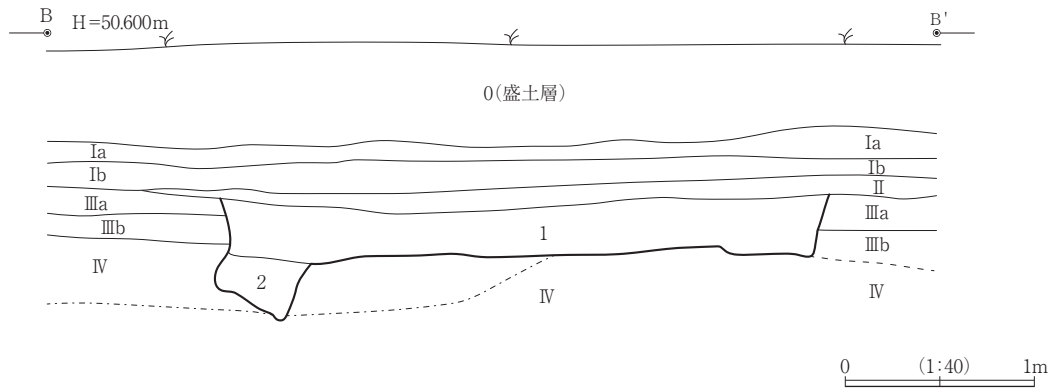
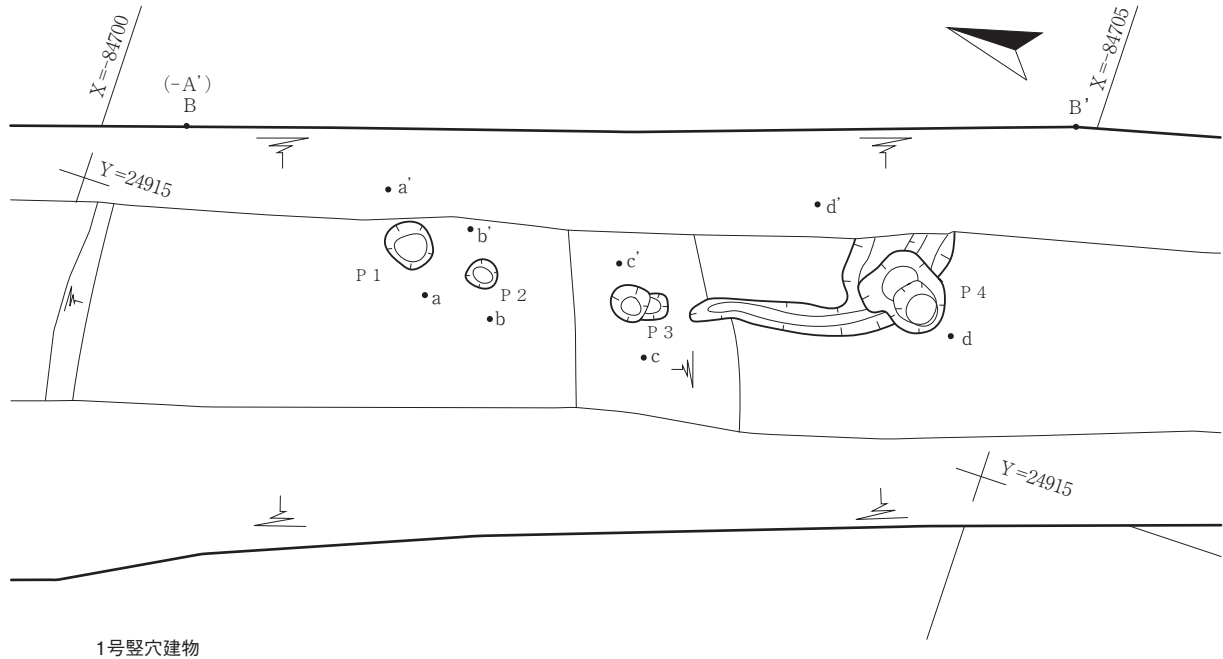
焼土遺構



P1



第3図 1号竪穴住居



B - B' 【1区東壁断面(1号竪穴建物付近)】

0 ~ II (3区に共通)

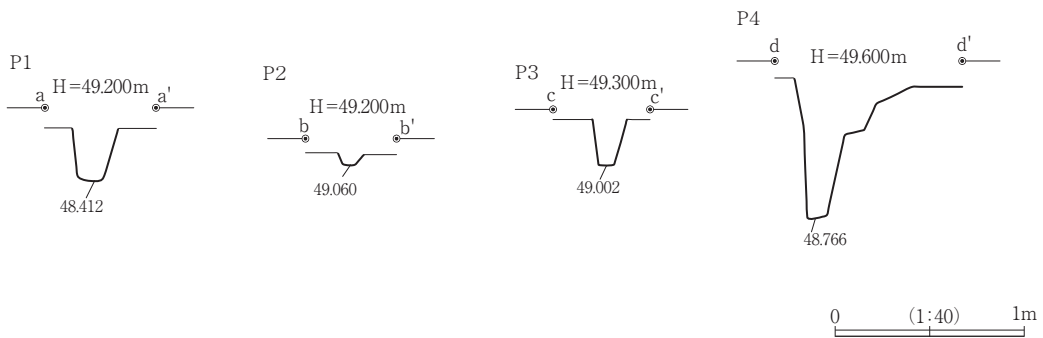
IIIa IIIの上部 黄褐色ブロック多く含み粘土質強い

IIIb IIIの下部 IIIaに比して黄褐色ブロック少なくやや砂質 IIIaより暗い

1 10YR3/3-3/4 暗褐色 シルト 粘性しまり中 黄褐色粘土ブロック(径5-10mm)多(全体に一樣に含む) 人為層

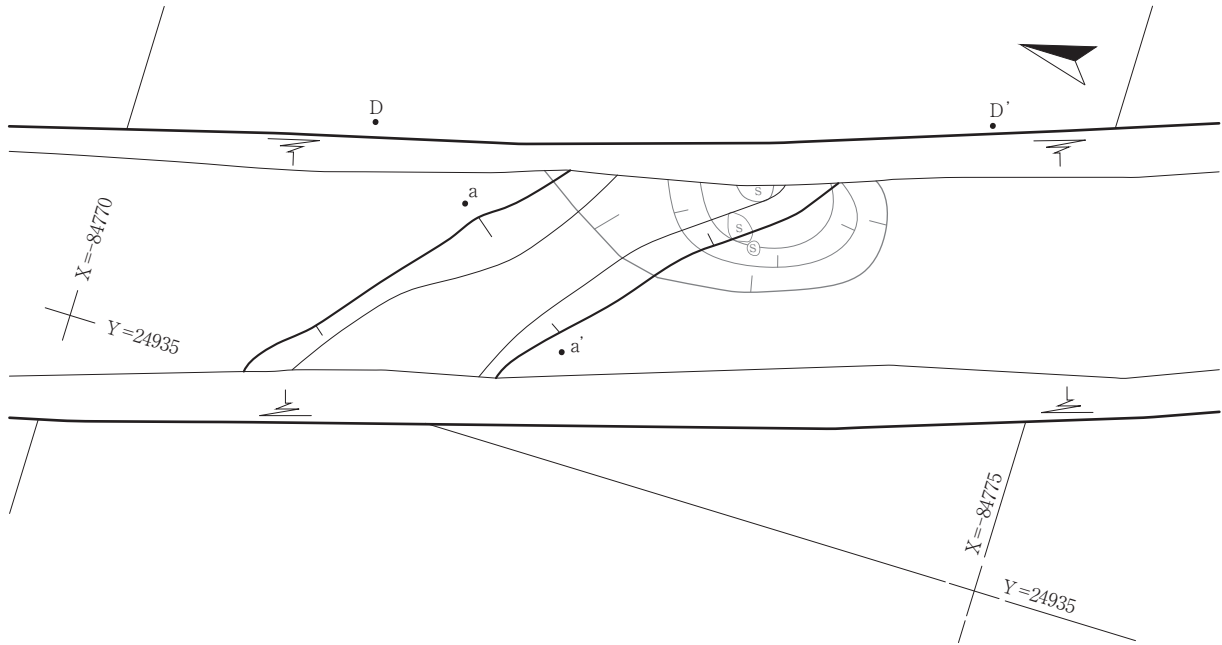
2 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり中 IV層土ブロック大量に含み全体黄味 1号竪穴建物附属柱穴埋土

IV 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり中 他地点(以南)に比して粘土質強い(他地点は砂質)

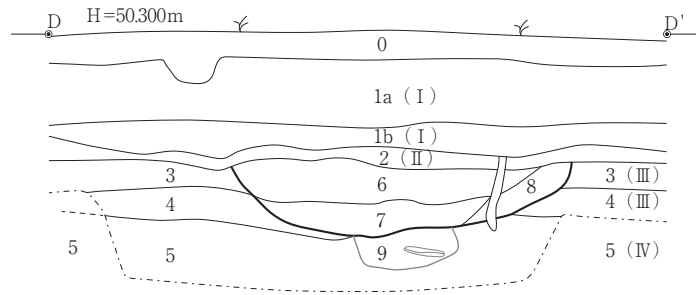


第4図 1号竪穴建物

(3) 境・山下遺跡



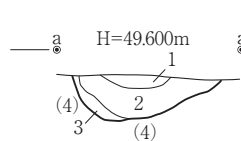
4区東壁断面(1号溝付近)



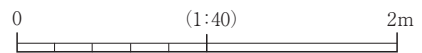
D-D' 【4区東壁断面】

- 0 表土
- 1 a 10YR4/3 におい黄褐 シルト 粘性中 しまりやや密 10YR5/6 シルト 粘性中 しまりやや密 比率は前者70%、後者30%の混合層 酸化鉄多く含む(グライ化した層) 耕作土
- 1 b 10YR4/4 褐色 シルト(酸化面時間がたつと10YR5/2 グライ化した面になる) 粘性やや強 しまり中 10YR5/6 シルト 粘性やや強 しまり中 比率は前者60%、後者40%の混合層 耕作土
- 2 10YR4/6 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密 10YR5/6 シルト 粘性・しまり中 比率は前者80%、後者20%の混合層 炭化物径1~3mm微量含む(グライ化した層)
- 3 10YR4/6 褐色 シルト 粘性・しまり中 10YR4/3 シルト 粘性・しまり中 比率は前者85%、後者15%
- 4 10YR4/6 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密 10YR5/4 シルト 粘性中 しまりやや密 炭化物径1~3mm少量含む
- 5 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物5%含む
- 6 10YR4/3 におい黄褐色 シルト 粘性・しまり中 炭化物5%含む ボサボサ土
- 7 10YR4/3 におい黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや強 10YR5/6 シルト 全体に30%含む
- 8 10YR5/6 黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや密
- 9 10YR4/4 褐色 シルト 粘性やや強 しまりやや弱 炭化物全体に80%含む
- ※1 a~1 b: I層相当 2: II層 3~4: III層 5: IV層

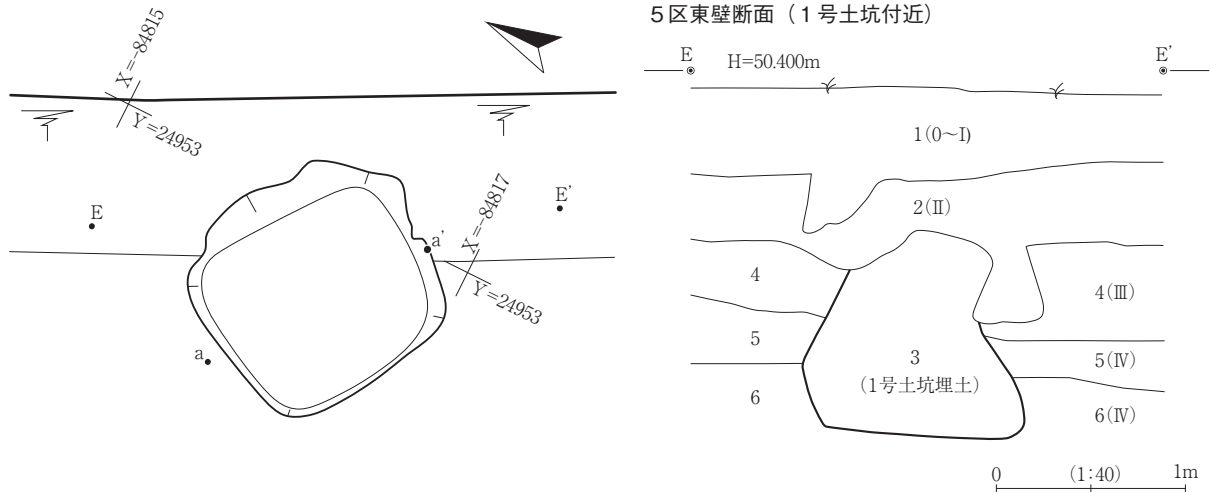
1号溝



- a-a'
- 1 10YR4/4 褐色 シルト 粘性・しまり中 10YR5/8 黄褐色シルト 40%含
- 2 10YR4/4 褐色 シルト 粘性・しまり中 10YR5/8 黄褐色シルト 70%含 炭粒(径1~3mm) 1%
- 3 10YR4/4 褐色 シルト 粘性・しまり中 10YR5/8 黄褐色シルト 80%含 崩落土層
- (4) 10YR4/4 褐色 シルト 粘性・しまり中 10YR5/8 黄褐色シルト 10%含 雲母粒多く含む



第5図 1号溝

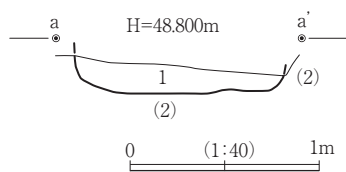


E - E' 【5区東壁断面（1号土坑付近）】

- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 しまりやや疎 円・角礫（径10-30mm）やや多 2層上部が攪乱を受けた人為層（現表土）
 - 2 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 粘性中 しまり密 炭粒（径5-10mm）微（目立つ）
 - 3 1号土坑埋土 本断面の2層以下の小ブロックが充填された混ブロック層（人為層）上～下部まで同様
 - 4 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐色～褐色 シルト 粘性中 しまり密 2層土に斑状に5層土ブロックを含む 漸移層様
 - 5 10YR4/4-4/6 褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや密 全体に白色微粒子含む（6層には含まれない）
 - 6 10YR4/4-4/6 褐色 シルト やや砂質帯びる 粘性中 しまりやや密
- ※ 1：0～I層相当 2：II層 3：1号土坑埋土 4：III層 5～6：IV層

※1号土坑は2層以下を構成する土塊により人為的に埋められている。上部から下部まで同様であり、一気に埋められた様子。この断面は調査区壁面のため法面としての勾配をもつ。このため、本来は円筒形を呈する土坑の埋土を斜めにカットした状態となり、上端が狭く下端が広くあらわれたことから、一見「フラスコ」様を呈する断面となっている。

1号土坑



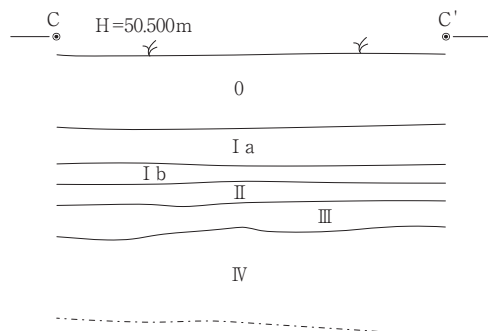
a - a'

- 1 10YR4/4-3/4 褐色-暗褐色シルトブロックと10YR3/3 暗褐色粘土質シルトブロックの混合層（径20-40mm、前者が90%）粘性・しまり中 人為層
- (2) 10YR4/4 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密

※トレンチ下面で検出した土坑。構築（掘りこみ）面は(2)層よりもずっと上位。平面形は隅丸方形。底面は概ね平坦に整っている。壁面は底面外縁から立ち上がりほぼ直立する。

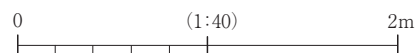
第6図 1号土坑

基本土層1（3区 調査区東壁断面）



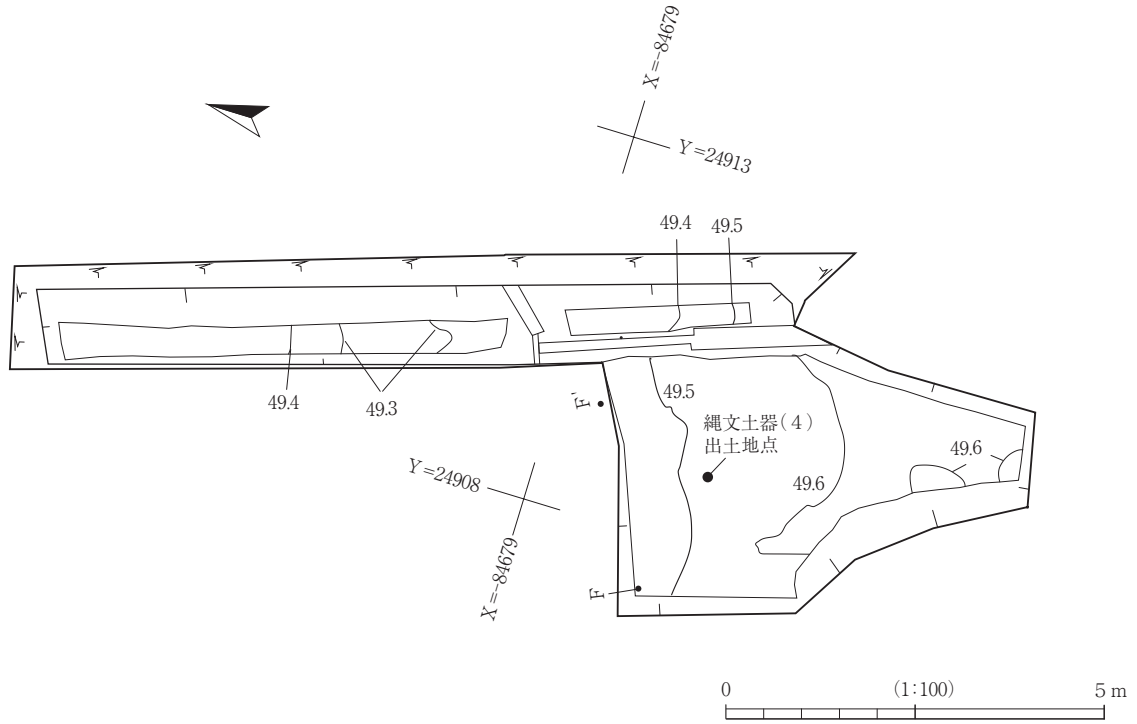
C - C' 【3区基本土層東壁断面】

- 0 盛土層（礫多量に含む）
- I a 10YR4/3-4/4 にぶい黄褐色～褐色 シルト-粘土質シルト 粘性中 しまりやや密 表土
- I b 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまり中 細かい酸化斑全体に顕著 グライ化した耕作土（水田耕作土か）
- II 10YR4/4 褐色 シルト 粘性中 しまりやや密 III層の上位に堆積する旧耕作土（周辺広く分布）
- III 10YR4/4-3/4 褐色～暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強 しまりやや密 黄褐色土ブロック多く含む暗褐色土層で全体に黄味強い きれいに削れずボソボソになる性質が特徴的
- IV 10YR4/4-4/6 褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまり中 暗褐～褐色砂層 地点により暗褐～褐色砂層と異なる様相を呈する 白色粒子混入・粘土質・黒色み強いなど異なる部分みられ、細分される

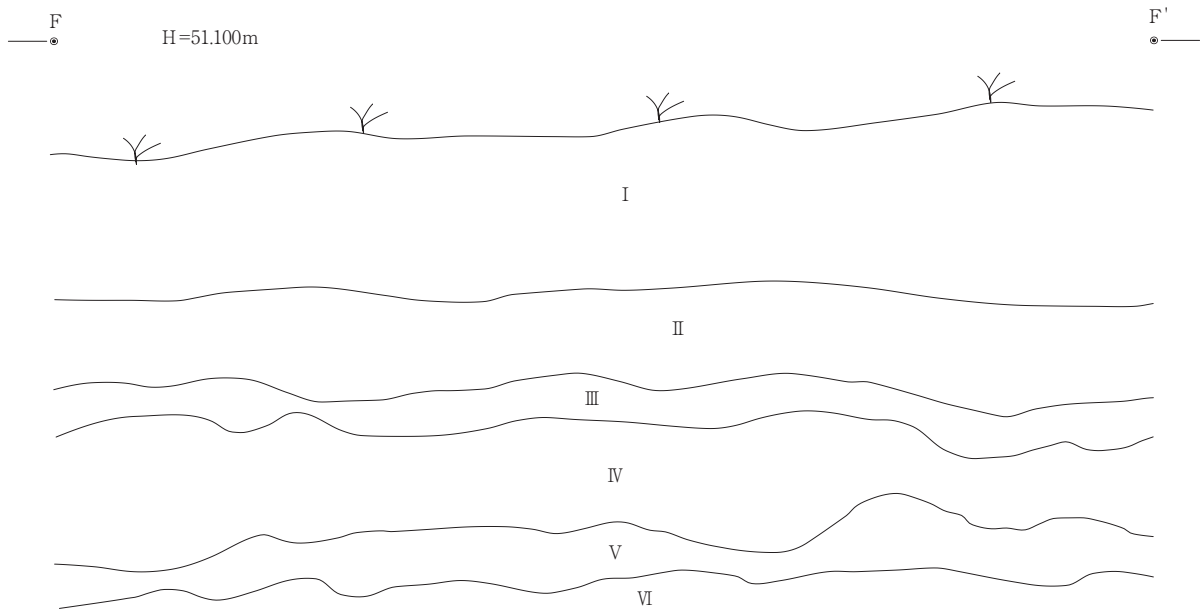


第7図 基本土層1

(3) 境・山下遺跡



基本土層2 (6区 調査区北壁断面)



6区北壁断面

F - F'

I 整地層 現表土 50~60cm

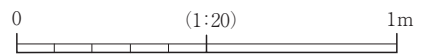
II 10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり中 径1~2cmの炭化物1%含む 古代面

III 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性・しまり中

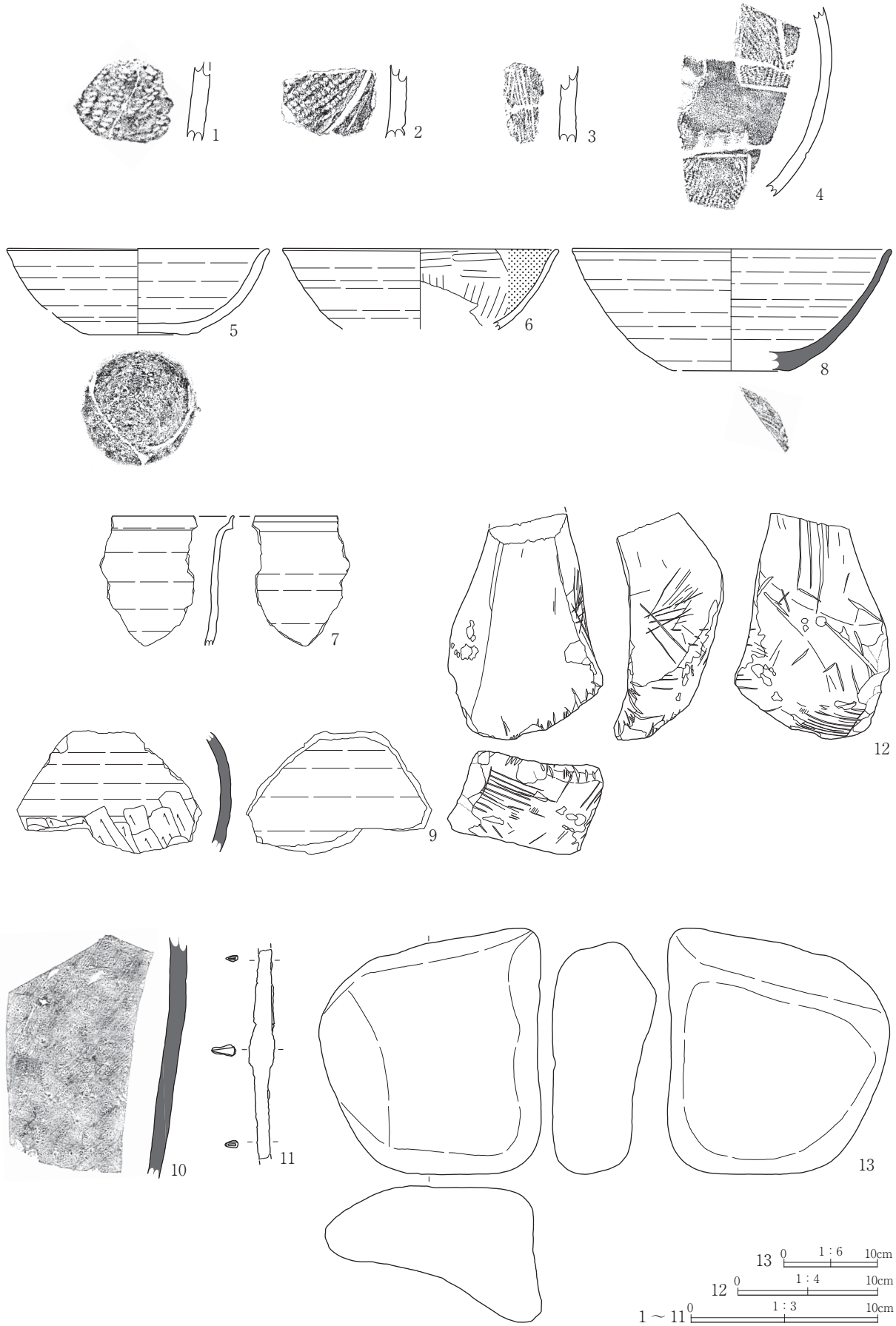
IV 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 粘性中 しまり強

V 10YR3/4 暗褐色 シルト 粘性弱 しまり中 縄文土器出土

VI 10YR4/4 褐色 粘土質 シルト 粘性・しまり強



第8図 6区 (全体図、基本土層2)



第9図 出土遺物

(3) 境・山下遺跡



空中写真 調査区全景（南西→）



空中写真 調査区全景（西→）

写真図版1 空中写真



空中写真 調査区全景



基本土層 3区東壁(西→)



1号竪穴住居全景 (西→)



検出状況 (西→)



P1・焼土塊・炭化物出土 (西→)



炉跡 (西→)



炉跡断面 (西→)



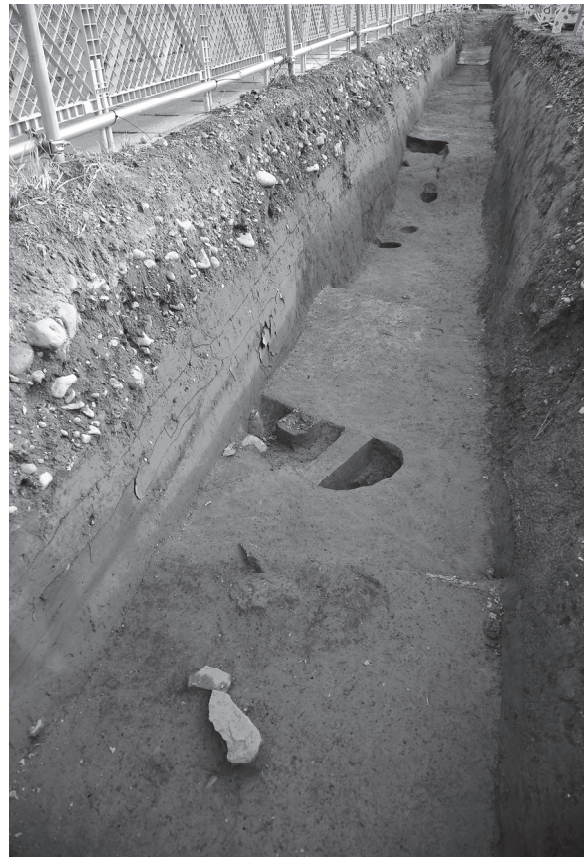
1号竪穴建物全景（西→）



1号竪穴建物床面炭化物検出状況（西→）



1区南端部深掘り



1号竪穴住居・1号竪穴建物全景（北→）

(3) 境・山下遺跡



1号土坑全景 (北西→)



1号土坑検出 (西→)



1号土坑断面 (南西→)



1号土坑断面 (西→)



1号溝全景 (北→)



1号溝断面 (北西→)



1号溝断面 (西→)



1号溝内礫出土状況 (西→)



2区全景 (南→)



3区全景 (南→)



4区深掘り (西→)



6区全景 (上が東)

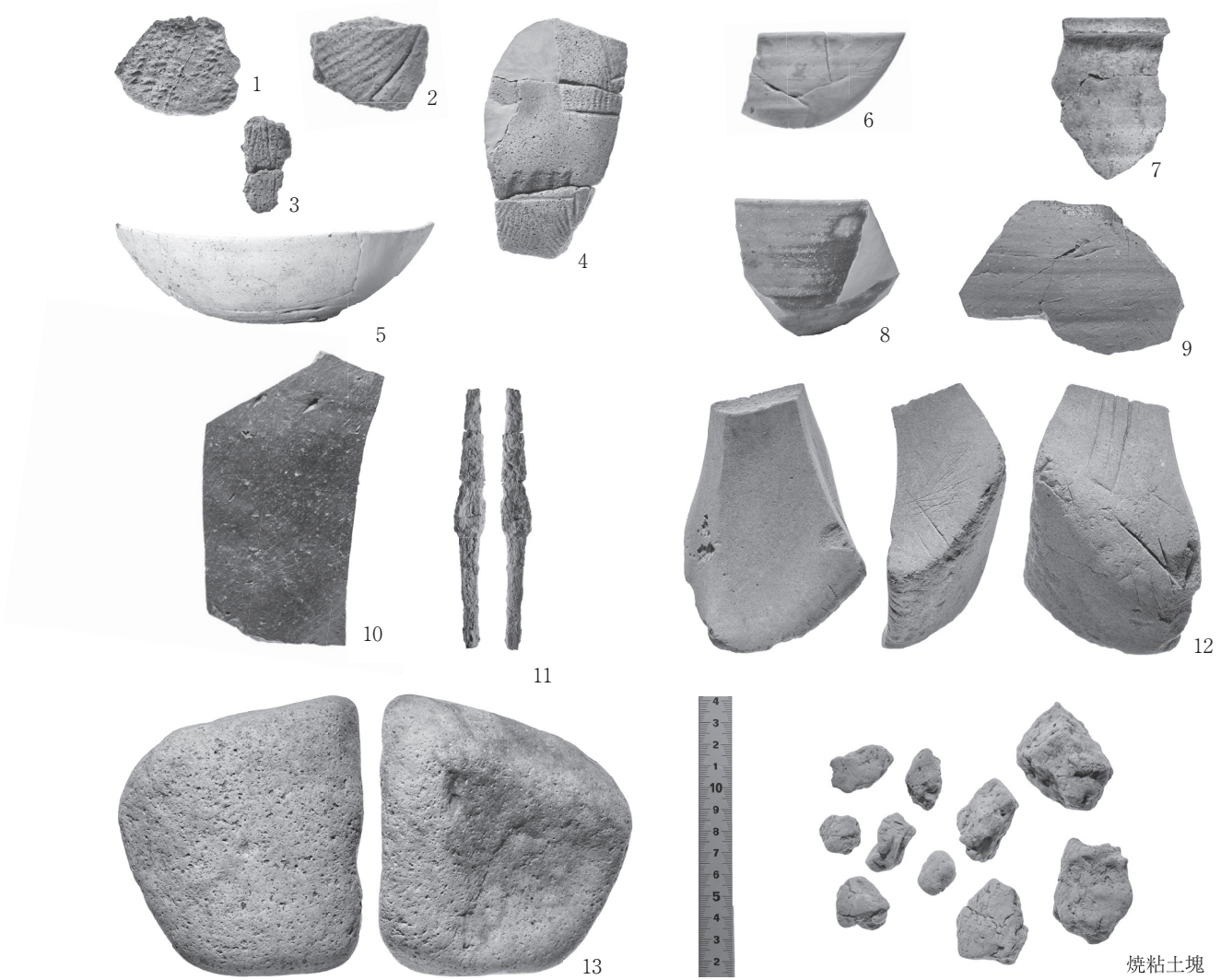


6区南側全景 (南→)



6区北壁断面 (南→)

(3) 境・山下遺跡



写真図版7 出土遺物

表1 出土遺物一覧（土器・土製品）

No	出土地点	層位	種別	器種	部位	調整等			その他
						内面	外面	底面	
1	3区	II層	縄文土器	深鉢	体	-	縄文	-	
2	5区	一括	縄文土器	深鉢	体	-	沈線・縄文	-	
3	1号溝状遺構	埋土	縄文土器	深鉢	体	-	撚糸文	-	
4	6区	V層	縄文土器	鉢類	体	-	沈線・縄文	-	
5	1号竪穴住居-P2	埋土	土師器	坏	略完	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切	
6	1号竪穴住居-P2	埋土	土師器	坏	口～体	ミガキ?→黒色処理	回転ナデ	-	
7	1号竪穴住居-P1	埋土下部	土師器	甕	口～体	回転ナデ	回転ナデ	-	
8	1号竪穴住居-P1	埋土下部	須恵器	坏	口～底	回転ナデ	回転ナデ	回転糸切	
9	1号竪穴住居-P2	埋土	須恵器	甕	体上	回転ナデ	回転ナデ・自然釉	-	
10	1号竪穴住居	床面	須恵器	甕	体下	ヘラナデ	ケズリ	-	
-	1号竪穴住居-P1	埋土下部	土製品	焼粘土塊		-	-	-	一部を写真掲載
-	1号竪穴住居-P2	埋土	土製品	焼粘土塊		-	-	-	一部を写真掲載

表2 出土遺物一覧（鉄製品・石器）

No	出土地点	層位	種別	器種	法量				その他
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
11	1号竪穴住居	床面	鉄製品	刀子	<11.3>	1.4	0.6	8.5	
12	1号竪穴住居-P2	埋土	石器	砥石	<16.0>	11.1	6.7	1,046.5	
13	1号竪穴住居-P2	埋土	石器	鉄床石	26.4	23.8	14.6	11,300.0	

II 発掘調査概報

凡 例

- ・遺跡位置図は、1: 50,000である。国土地理院2001『数値地図－岩手』を使用した。
- ・本書で記載されているコンテナの大きさは内寸で下記のとおりである。
 - 大コンテナ：42×32×30cm
 - 中コンテナ：42×32×20cm
 - 小コンテナ：42×32×10cm
- ・本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。
(例) 竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

ほうじょうだて
(4) 北条館跡

所在地 紫波郡紫波町大字北日詰字城内119番地の1ほか
 委託者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事業名 北上川緊急治水対策事業
 発掘調査期間 令和2年4月8日～9月3日
 調査終了面積 1,880㎡
 調査担当者 村田 淳・福島正和・酒井野々子
 主要な時代 平安・中世・近世



遺跡の立地

遺跡は、JR 東北本線日詰駅から東へ約2 km、北上川の支流である平沢川の西岸に位置し、北上川により形成された河岸段丘上に立地する。遺構検出面の標高は93m前後で、調査前は畑地等である。平成30年度からの継続調査であり、調査区は令和元年度調査区の北側に隣接する。

調査の概要

検出遺構は、古代（9～10世紀）の竪穴建物2軒、古代（12世紀）の土坑1基、溝3条、中世（16世紀）の竪穴建物5軒、掘立柱建物約40棟、堀2条、溝1条、中世～近世初頭の炉跡7基、土坑4基、近世～近代の墓20基、古代～中世及び時期不明の土坑25基、性格不明遺構2基、沢状地形1箇所、整地範囲1箇所、柱穴1,596個（掘立柱建物を構成するもの含む）である。

出土遺物は、縄文土器（晩期）少量、古代の土器（土師器・須恵器・かわらけ）、中国産磁器（白磁・青磁）、国産陶器（渥美・常滑・須恵器系）中コンテナ3箱、中世の中国産磁器（白磁・青磁・染付）、国産陶器（瀬戸美濃等）中コンテナ2.5箱、古代～中世の金属製品（刀子・釘・毛抜き・鍋・鏡・貴金具・飾金具等）小コンテナ1.5箱、石器・石製品（石臼・石鉢・砥石・敲磨器類）中コンテナ10箱、銭貨（景德元宝・洪武通宝・永楽通宝・無文銭）約20枚、近世～近代の陶磁器（肥前・瀬戸美濃）小コンテナ0.5箱、金属製品（簪・釘等）小コンテナ0.5箱、寛永通宝約20枚である。

昨年度までの調査成果から16世紀代を中心に機能した城館と考えていたが、堀堆積土の下層から15世紀代の陶磁器が出土したことから築城年代が15世紀に遡る可能性が高くなった。3箇年で検出された掘立柱建物は約100棟にのぼり、竪穴建物や堀を含め重複が著しいことも城館の存続期間が比較的長かったことを示しているといえる。



戦国時代の堀全景



調査区全景（南東から）

(5) ^{あいのむら}間野村遺跡

所在地 紫波郡紫波町犬吠森字境47-8ほか
委託者 岩手県盛岡広域振興局土木部
事業名 主要地方道紫波江繋線星山地区道路改良事業
発掘調査期間 令和2年9月1日～11月13日
調査終了面積 1,400㎡
調査担当者 福島正和・羽柴直人
主要な時代 縄文・平安・中世



遺跡の立地

遺跡は、JR 東北本線紫波中央駅の東2.4km、北上川の東岸最下段の低位段丘に立地する。調査地点は北上川に架かる紫波橋まで約300mと北上川に近い地点である。調査地点の標高は約95mで、調査前は宅地と草地であった。次年度以降、今回調査地のさらに東側も調査の対象となる可能性がある。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の陥し穴2基、土坑15基、平安時代の竪穴住居2棟、掘立柱建物1棟、土坑6基、溝2条、堀2条、中世の竪穴建物1棟、掘立柱建物2棟、古代から中世にかけての柱穴状土坑72個である。平安時代の竪穴住居1棟は、石組によって構築された煙道と煙出が非常に特徴的である。また、調査区東側に分布する3基の土坑は、平面方形基調であり、1基を除き遺物も比較的まとまって出土した。このことから、これら3基は上述の竪穴住居と同じ時期の墓墳である可能性が高い。堀2条は遺物が出土していないため、時期の特定は難しいが、地形に沿って2条並走すること、遺構の切り合い、埋土の特徴等から中世以降の堀ではないと思われ、消極的であるが現段階では平安時代の後半頃に築かれた堀であると考えられる。

出土遺物は、縄文時代の土器・石鏃各1点、平安時代の土師器・須恵器大コンテナ3箱、砥石2点、かわらけ片と思われる土器片1点、中世陶磁器2片である。

紫波町内の北上川東岸域では、これまで埋蔵文化財の発掘調査事例が数少ないため地域的な様相は不明である。しかし、今回の発掘調査で縄文時代の狩猟域、古代の集落、中世の集落が存在することが判明した。この成果からみて、近隣の同一地形面においても同様に遺跡が存在することを示唆している。



平安時代の竪穴住居に付属する石組の煙道・煙出



2条の堀全景

(6) ^{なかばやしした}中林下遺跡

所在地 奥州市水沢真城中林下95番地ほか
 委託者 岩手県南広域振興局農政部
 事業名 経営体育成基盤整備事業（真城南地区）
 発掘調査期間 令和2年4月7日～11月30日
 調査終了面積 10,300㎡
 調査担当者 村上 拓・阿部勝則・杉沢昭太郎・西澤正晴・
 川又 晋・野中裕貴
 主要な時代 平安・中世



遺跡の立地

遺跡は、奥州市水沢真城地区に所在し、西方に広がる河岸段丘の東縁に大深沢川が形成した小規模な扇状地に立地する。調査前の現況は水田である。次年度以降、調査を継続する予定である。

調査の概要

検出遺構は、平安時代の竪穴住居2棟、竪穴状遺構4基、掘立柱建物12棟、焼土遺構1基、土坑8基、柱穴1,039個、溝（堀）17条、性格不明遺構17箇所（内訳：竪穴状5、土坑状4、溝状1、礫集中4、土器集中3）である。

出土遺物は、平安時代土師器坏・須恵器坏・甕18箱、緑釉陶器碗片3点、瓦片6点、中世国産陶器片（12～16世紀）1袋、中国産磁器（14～16世紀）数点、木質遺物（曲物・下駄・柱材・礎板ほか）10箱、銭貨4点、縄文時代の土器・石器類数点、石冠1点である。

平安時代の掘立柱建物は方形プランの大型柱穴で構成され、軸線方向を同じくするものを複数確認した。また内部に柱材・礎板が良好に遺存する柱穴を多数検出した。竪穴住居をほぼ伴わず規格の整った建物がまとまって分布する点は、一般集落とは異なる性格を示唆するものと思われる。

このほか遺跡中央部では堀（大溝）に区画された範囲を確認した。出土遺物の年代観から16世紀後半期の居館跡とみられる。堀区画内の全容は明らかでないが、西半部が建物群、東半部は池を配した空間となるらしい。堀は連続せず、建物配置空間に接する南辺西部と、池が面する東辺南部で途切れ、外部に通じる構造となっている。

次年度以降の調査で変遷過程や性格についてより詳細に明らかにしたい。



平安時代の掘立柱建物



中世居館跡

(7) 明神下遺跡

所在地 奥州市胆沢字下堰袋44-1ほか
委託者 岩手県南広域振興局農政部
事業名 経営体育成基盤整備事業（若柳中部地区）
発掘調査期間 令和2年4月7日～11月30日
調査終了面積 12,000㎡
調査担当者 須原 拓・溜 浩二郎・丸山直美・村木 敬・
八木勝枝・酒井野々子
主要な時代 平安・中世



遺跡の立地

遺跡は、国道397号線沿い、於呂閉志胆沢川神社の北側隣接地に位置し、胆沢川の南岸に形成された河岸段丘に立地する。標高は128m前後である。調査前は水田として利用されている。なお来年度も調査を継続する予定である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居・工房69棟、掘立柱建物10棟、土坑・陥し穴状遺構64基、溝15条、方形周溝(?) 6基、柱穴状土坑312個、墓壙1基である。出土遺物から墓壙を除く全ての遺構は平安時代（9世紀後半から10世紀前半頃）に帰属すると推測する。墓壙は永楽通宝が出土しているため、中世から近世初めと推測する。

出土遺物は、古代が主体で、土師器・須恵器が大コンテナ39箱、緑釉陶器片1点、灰釉陶器片3点、砥石15点以上、羽口の破片数点、鉄製品（短刀・刀子・鉄鏃・紡錘車・穂積具など）120点、鉄滓数点などであり、特筆すべきものとして1棟の竪穴住居から石帯8点（巡方3点、丸軋5点）が一括して出土した。

他に縄文土器・石器数点、黒曜石の剥片40点が出土している。また墓壙からは人骨と共に永楽通宝7枚と内耳鉄鍋1点が出土している。

今回の発掘調査で、本遺跡が平安時代（9世紀後半～10世紀前半）の大規模な集落であることが判明し、特に石帯や緑釉陶器、灰釉陶器が出土していることから、地域的にも重要な集落であったものと推測する。また鉄製品が多く、羽口・鉄滓・砥石も出土していることから、集落内では鍛冶などの鉄生産が頻繁に行われていたことが考えられる。



航空写真（東から）



古代の竪穴住居（南西から）

(8) ^{ひらしみず}平清水 I・II 遺跡

所在地 九戸郡野田村大字野田第22地割内
 委託者 岩手県県北広域振興局農政部
 事業名 農業競争力強化基盤整備事業（泉沢・中平地区）
 発掘調査期間 令和2年10月16日～11月26日
 調査終了面積 1,132㎡
 調査担当者 阿部勝則・溜 浩二郎
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道リアス線陸中野田駅から南西2.5km付近に位置する。十府ヶ浦に向かって東に流れる明内川右岸の段丘に立地し、標高約60～68mで、現況は水田である。調査区の微地形は、南西から北東側に延びる尾根とその間の谷部などに分かれる。現在、段丘面を東西に走る2級村道中平上明内線を境に南側を平清水 I 遺跡、北側を平清水 II 遺跡と分けられている。また、明内川左岸の一段低い段丘、標高約42～50mには、蕨手刀が出土した平清水 III 遺跡が立地する。今年度は4路線（1～4区）1,132㎡について調査を行った。調査は次年度以降、継続して行われる予定である。

調査の概要

検出遺構は、1区で確認された縄文時代の陥し穴状遺構1基である。長さ125cm以上、幅20cm、深さ50cm、平面形は溝状である。1区は標高約67mで、南西から北東側に延びる尾根上に位置する。

2区・3区・4区は、標高60～64mと低く、谷部に位置する。また、かつての開田による地形改変で著しく削平を受けている。遺構は確認されなかった。

出土遺物は、縄文土器片数点、弥生土器片1点、石器2点、コハク片などである。

今回、陥し穴状遺構が確認された地点は、平成13・14年度調査で縄文時代前期末葉から中期前葉を主体とする集落が確認された地点と連続する尾根上にあり、類似する溝状の陥し穴状遺構は、平成13・14年度調査でも7基確認されている。平清水 II 遺跡の縄文時代の集落は、平成13・14年度調査が行われた地点を含む遺跡範囲の北端に沿って南西から北東側に延びる尾根とその南斜面に広がるものと推測される。



航空写真（西から）



陥し穴状遺構（東から）

(9) 二子城跡

所在地 北上市二子町渋谷60-1ほか
委託者 北上市商工部企業立地課
事業名 北上市特定公共下水道終末処理場整備事業
発掘調査期間 令和2年4月9日～8月31日
調査終了面積 20,230㎡
調査担当者 羽柴直人・杉沢昭太郎・丸山直美
主要な時代 縄文・弥生・中世



遺跡の立地

遺跡は、北上市北東部の北工業団地東端付近、JR東北本線村崎野駅から北東約2kmの距離に位置している。立地は北上川西岸の河岸段丘と丘陵、現況は山林で、標高は82～98mである。令和元年度からの継続調査で今回の調査区は元年度調査区の北～西側及び東側に広がる。

調査の概要

検出遺構は、中世の堀3条と溝1条、近世～近代の掘立柱建物1棟、古代の炭窯2基、弥生時代の竪穴住居2棟と土坑（墓壙）1基、縄文時代の竪穴住居1棟と陥し穴状土坑19基と土坑1基、時期未確定の土坑3基である。出土遺物は縄文土器大コンテナ2箱（主に中期前半）、弥生土器小コンテナ1箱（湯舟沢式）、石皿1点、石鏃・スクレイパー等5点である。

調査区西部で南北に縦貫する大規模な堀SD3を約120mにわたって検出した。これは、二子城全域の西辺を画する堀と解釈され、二子城の城域の西辺が明確となった。また、調査区西側尾根頂部で、弥生時代後期（湯舟沢式）の住居2棟を検出し、当該期の良好な資料を追加することができた。また弥生時代後期の土器片を含む土坑（SK3）から石鏃が2点出土し、墓壙と推測される。



堀（SD3）全景

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんどはくつちようさほうこくしょ							
書名	令和2年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第733集							
編著者名	溜 浩二郎							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2021年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きどぼいせき 木戸場遺跡	いわてけん 岩手県 くじし 久慈市 きむらいはまちょう 侍浜町 もとまち ち ない 本町地内	03207	JG00-0135	40度 15分 49秒	141度 47分 25秒	2020.05.07 ～ 2020.06.25	2,900㎡	三陸沿岸道路（久慈北道路）建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
木戸場遺跡	狩猟場 散布地	縄文・弥生	土坑 陥し穴状遺構 集石遺構	1基 10基 2基	縄文土器、弥生土器、石 匙			
要約	今回の調査区はH29度調査区同様、主に縄文時代に狩猟場として活用されていた場所であったことが確認された。調査区南側の斜面高位面から平坦部分では土坑や集石遺構が見つかっており、一時期においては生活領域の一部として利用されていた可能性も考えられる。							

*緯度・経度は世界測地系（2011）による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんどはつくつちようさほうこくしょ							
書名	令和2年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第733集							
編著者名	星 雅之・西澤正晴・北田 勲							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2021年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかたにいせき 中平遺跡	いわてけん 岩手県 くのへぐん 九戸郡 のだむら 野田村 おおあざの 大字野田 だい 第13地割 おおだいの 大平野 ちない 地内	03503	JG60-0258	40度 06分 20秒	141度 48分 36秒	2020.07.16 ～ 2020.08.07	202㎡	三陸沿岸道 路建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中平遺跡	散布地 狩猟場	縄文	陥し穴状遺構 1基					
		古代		土師器				
		時期不明	溝 3条					
		近現代		陶器				
要約	<p>岩手県指定史跡「野田堅穴住居址群」として知られる中平遺跡の南東端付近の調査を実施した。調査区の現況は現道で、村道建設や水道管埋設時の攪乱による削平が著しい。</p> <p>調査成果として、縄文時代の陥し穴1基と溝3条が検出された。溝3条は、東西方向にほぼ平行に走り、各所で重複関係にある。調査区が狭く、なおかつ古い水道管に各所を破壊されていることもあり、時代や用途の解明には至っていない。</p>							

*緯度・経度は世界測地系（2011）による数値である。

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんどはくつちようさほうこくしょ							
書名	令和2年度発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第733集							
編著者名	村上 拓・溜 浩二郎							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2021年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかい やました いせき 境・山下遺跡	いわてけん 岩手県 おうちゅうし 奥州市 えさしいなせあぞ 江刺稲瀬字 やました 山下616-7 ほか	03215	ME86-0069	39度 15分 08秒	141度 07分 20秒	2019.09.01 ～ 2019.11.11	600㎡	一関北上線 山下地区地 域連携道路 整備事業
			ME86-1123			2020.04.08 ～ 2020.05.27		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
境・山下遺跡	散布地	縄文時代			土器			
	集落跡	平安	竪穴住居	1棟	土師器、須恵器、刀子、 砥石			
		中世	竪穴建物 土坑	1棟 1基				
	その他	時期不明	溝	1条				
要約	今回の調査区が平安時代前期を主とする集落の一部であることが明らかとなった。他に検出した遺構や出土遺物から縄文時代から中世まで断続的に生活領域として利用されていた場所であることが判明した。							

*緯度・経度は世界測地系（2011）による数値である。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第733集

令和2年度発掘調査報告書

印刷 令和3年3月12日

発行 令和3年3月19日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019)638-9001
FAX (019)638-8563

発行 (公財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019)654-2235
FAX (019)625-3595

印刷 大更印刷株式会社
〒028-7111 岩手県八幡平市大更21-16-9
電話 (0195)76-2514
